



091663-000-7

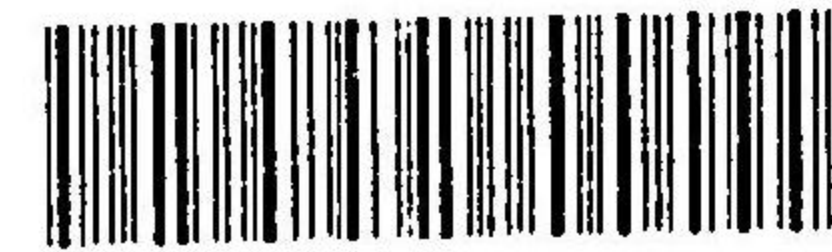
特11-85

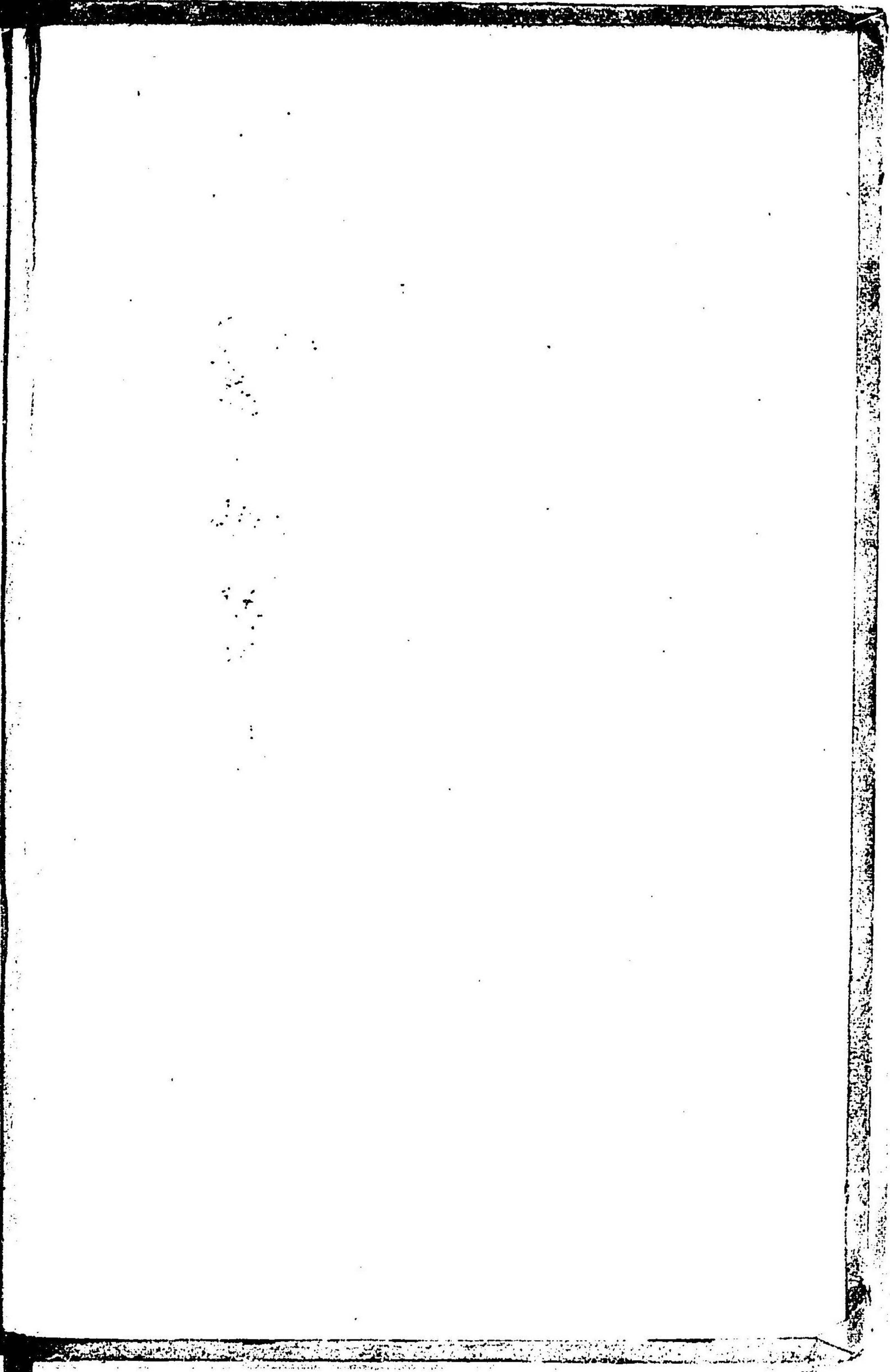
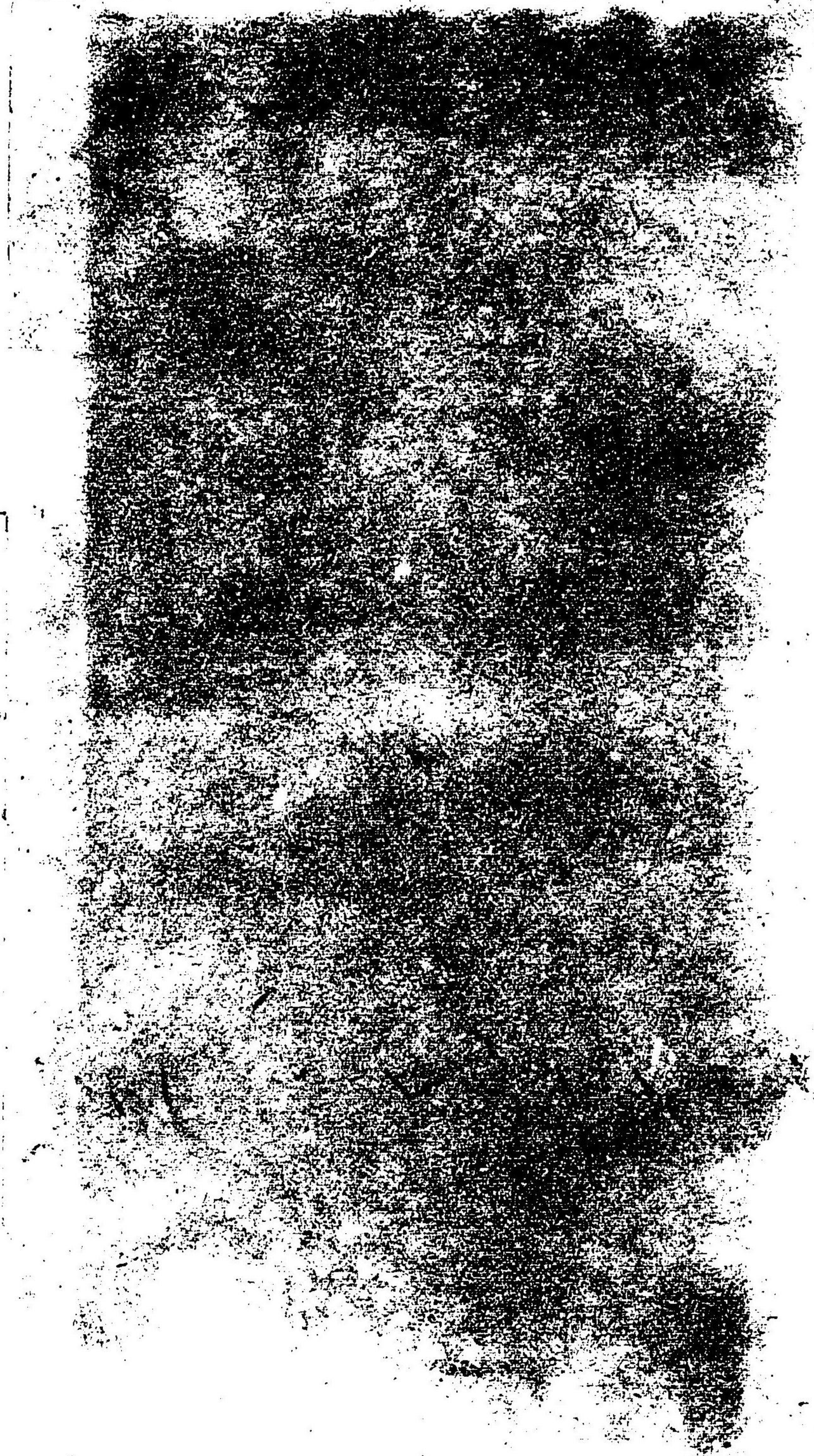
滑稽記事論說文

瘦々亭 骨皮道人 / 編

M23

DBO-0124





№ 5422

/23

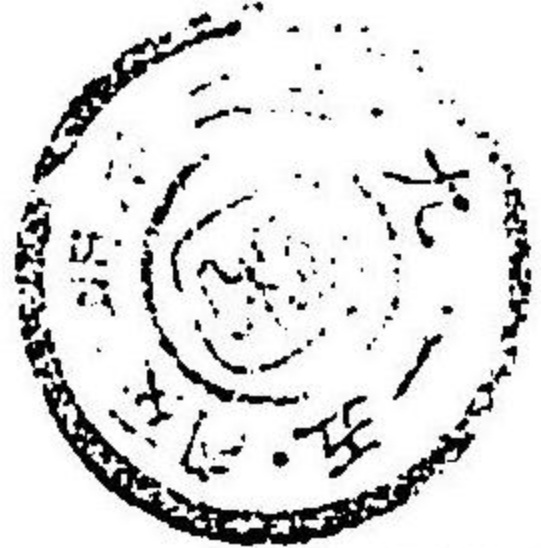
付券11

85

御座

区
書
之
上

河
原
守



之果其善道
者有矣

曰此善道
曰此善道

七首書
昭和九年八月
齊藤道子
歎



○滑稽記事論説文目錄

- 太平樂の記
- 自由堂建立の記
- 馬鹿の説
- 放屁の説
- 戀の字の説
- 焼餅論
- 似て非なるの論

○烟草論

○柿の辨

○可樂の辨

○二豎を追ふ文

○三味線と戒むる文

○痴情の解

○笑ひの解

○舞乱散史と與ふる書

○好遊居士と答ふる書

○賄賂先生の傳

○平氣野平左衛門の傳

○鼈頭類語

滑稽記事論說文目錄終

滑稽新用文章目録

- 年始の文 同返事
- 茶會よ友を招く文 同
- 遊歩よ誘ふ文 同
- 婚姻を賀する文 同
- 仕立物を催促する文 同
- 温泉よ行を知らせる文 同
- 勘定を取ら遣る文 同
- 醫者を頼む文 同
- 引越の手傳よ人を頼む文 同
- 田産を知らせる文 同

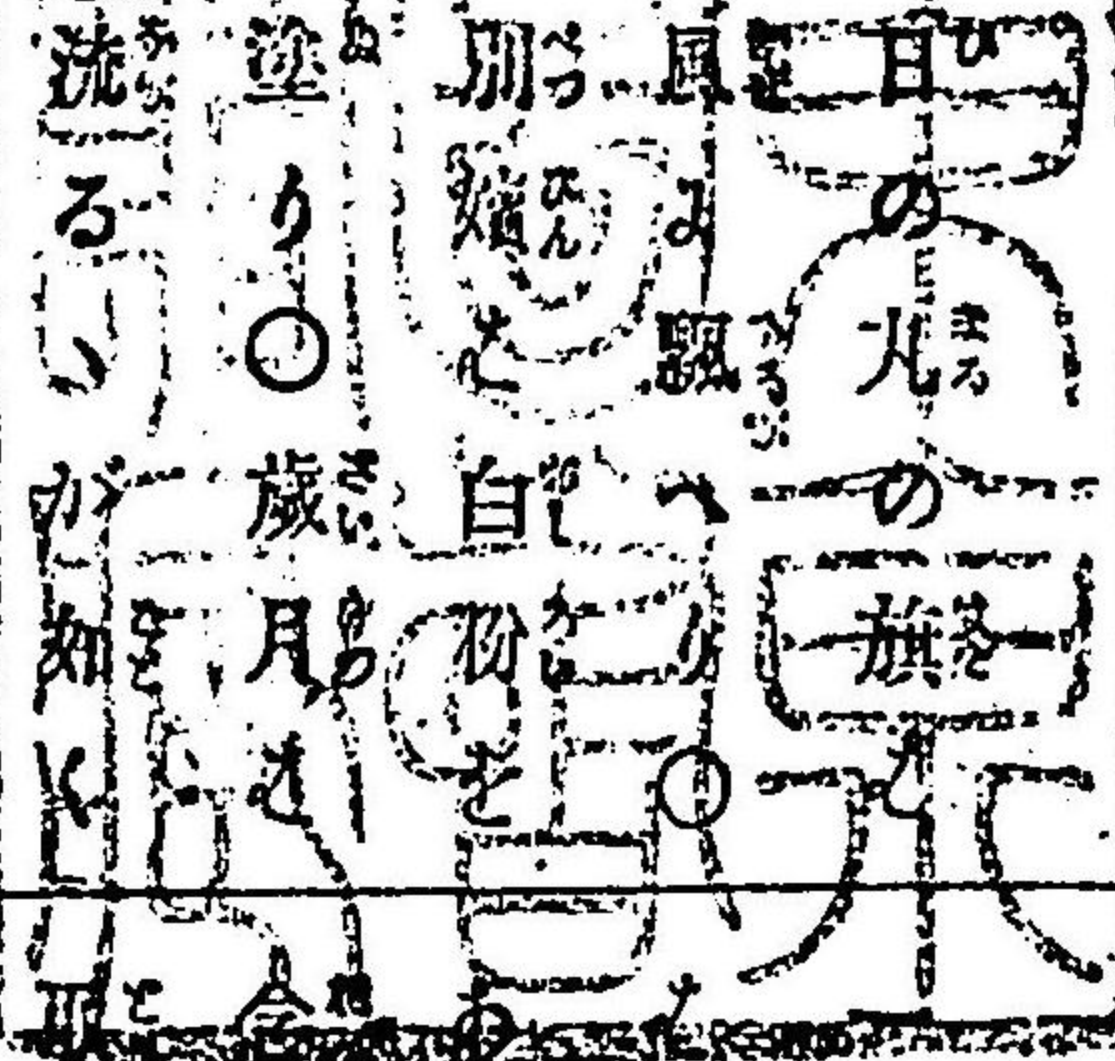
- 留守よ來りし人よ送る文 同返事
- 商業の盛衰よ問合せる文 同
- 發明品の見本を送る文 同
- 病後人よ送る文 同
- 人の安否を問ふ文 同
- 物品を贈る文 同
- 頼み置し事を問合せる文 同
- 賀筵よ人を招く文 同
- 忘年會を催ふ文 同

滑稽記事論説

滑稽記事論説文

文類語

太平樂の記



又新年を迎へ
○鳥追はチン
テンシヤンと

年三百六十五日、一月一日より樂さとなし、貧乏
則ち貧乏と雖ども、餅あり以て腹を脹すべし、酒
り以て顔を赤くすべし、既よ酔ひ既よ食ひて又餘
なし、嗚呼亦樂からずや、纒よ一夜を送れと借金
の聲も鶯の聲とある、實よ泰平の氣象と元旦よ在
りと謂ふべし、余も亦酔て且つ食ひ日向よ脊を曝し、
ぐらく、扇を搦て晝寝を爲す、時よ美人あり花顔柳
腰、べたく、白粉を塗白壁の化物然として來る、其

三味線を弾來り
○泰平の春
と迎へて豈よ
目出度と祝せ
ざるべけんや
○以て腹鼓を
打よ足る○ふ
らく
然と門
を出て○一年
の事と元日よ
在り○馬車と

婀娜たるを蕪者の如く其様子たるを權妻の如く、豊
臉笑ひを帯び采唇媚を含み、余の膝頭より精着して日
く、旦那へ旦那と進年を迎へながら何ぞ愉快を催ふ
さるるや、妾願くは旦那と一杯を酌み以て新年艶會
の式を行さん、妾已よ酒肴を命じ來ると、言ひ畢て
輒然一笑し、何となく思ひ有氣の情を寄す、余や生
來婦人の爲め惚られたるとあらず、我より頭を下
げて機嫌を取り、やいのくを百遍極込と雖ども、
相摸のお三どんも猶未だ頭を縦に振ず、矧んや絶世
の美人おや、然るは何ぞ圖らん今年今月今日何等の
吉日ぞ、美人倒まよ來つて我は戀着す、天下の祥

人力車と○鳴
呼愉快なる哉
○狂歌又曰く
酒飲ば何處か
心の春めきて
借金取も鶯の
聲ト宜ある哉
○鬢公と酔て
猿の如く車夫
と酔て狸の如
ま○敢て賀せ

瑞何ぞ此も過ん、人間の愉快何ぞ此に比せん、余早
く已よ魂飛び肉消し、目尻を下げ鼻の下を仰し、彼
の纖々たる玉手を握り口言んと欲して言ふ能はず、
唯別嬪の顔を横目よ視て身体をブルブル振すのみ、
蓋し歡喜極つて此に至るあり、既よして酒屋より銘
酒色盛りを送り去り、料理屋と珍鴨を運び來る、美人
余の脊中をポーンと一つ叩て曰く、旦那何ぞ凡庸然
たる、宜しく一杯を傾くべしと、玉手杯を擧て余よ
屬し又佳肴を侷めて喫一喫せしむ、酒の美あると眞
よ漢宮仙掌の甘露を欺き、肉の旨きを幕府時代の菜
鶴の如き非ず、之を傾くして美人漸く微酔を帯び、

ざるべけんや
○友人へトレ
ケと爲て入り
来り○愉々快
快と呼び○出
し拔よ脊中を
ドシンと叩て
曰く○徒らよ
紅裙の風又颯
へるを見て涎
を流し○思と

四
險兒紅を潮し海棠春又嫁して紅唇將又笑之んとする
に異ならず、余や精神恍惚として仙境に遊ぶが如く
唯愉々快々と叫ぶのみ、手の舞ひ足の踏ところを知
らず、美人醉又乗じて且つ笑ひ且つ云ふ、今宵旦那
の爲め又枕塵を拂とんと欲し己又寢床を彼の處に設
くと、遂又余の手を執て將又鴛鴦衾裏に入らんとす、
此時人あり聲を掛てオイ〜と呼起す、余驚き起れ
を噫々惜ひべし此は是れ一月の初夢なり、余呆然頭
を擡げて視一視すれば我身之依然として破屋の中
在り、只見る一個の怪物來つて枕上立つを、其人
顔色憔悴して虎列的を病が如く、形容枯稿して俄鬼

す愚痴を溢し
○之を本年の
泣初と爲す○
徒ら又虎鬚を
粧ふて英雄よ
擬するに猶是
れ太神樂の獅
の如き歟○感
を起して以爲
らく○皆是れ
お多福のみ○

道又迷ふに似たり、頭髮と蓬々として唐獅を欺き、
身又纏綿を纏ふて乞兒も畜あらず、余豈又吃驚仰天
せざらんや、殆んど腰を抜かして起つ能はず、怪物
啞然として笑て曰く、汝が驚く勿れ汝が初夢を與
へて一快を取らしむる者之即ち予なり、余曰く抑汝
ち之何者ぞ想ふ又惡神又非されを化物なり、怨敵退
散々々々々、曰く予之汝と偕老の契を結ぶ者即ち貧
乏神なり、余又驚て曰く我未だ曾て貧乏神を祀らざ
るも、貧乏神の方より無理又來つて我を惱すなり、
我之本年より更に福の神を祀らんと欲す去るべし去
るべし、貧乏神承知せずして曰く、汝が馬鹿を言ふ

或之藝妓あり
 或之權妻あり
 ○何よ致せ僕
 と平氣の平三
 ○二日を以て
 初夢とする
 誤れり○寶船
 と何の益かあ
 る○なんと飽
 坊の極あらず
 や○只驚いて

勿れ、予若し汝が家を去らば汝之忽ち乞兒と爲らん、
 汝が知らずや福神と曾て福を授けず、貧神却つて人
 を救ふ、何となれば則ち、汝が如き懶惰漢も亦咽が
 干上るよ因て已を得ず勞働す、是れ實よ予の大徳な
 り、若し福神人毎よ福を授け去らば、奢侈風を爲し
 貨財浪費、遂に國を擧て眞個の赤貧とあるよ至らん
 のみ、予今試みよ汝ちよ春夢を與ふ、汝ち忽ち鼻下
 を伸し恍然魂飛で全く百事を忘る、夢よして尙且つ
 然り、若し眞よ愉快を盡さを忽ち其身を誤らん、是
 を以て予未だ汝の家を去るよ忍びざるなり、方今浮
 雲の富貴を恃んで奢侈よ耽り酒色よ溺る者と、福神

舌を巻のみ○
 人の愉快よ指
 を咬へんより
 と寧ろ寝轉ん
 で夢を見るよ
 如す○是を馬
 鹿くしと謂
 されば何をか
 馬鹿くしと
 謂ん○鳥無さ
 里の蝙蝠然た

の加護を受るが如しと雖も、其實之福徳を害するお
 り、此輩が福徳を濫用するよ因て社會の貧棒を増長
 し、商業衰へ工業退き金路も亦た塞つて奈何ともす
 る能はず、福神果して何の功かある、汝ち永く予と
 交らば幸ひよ咽を濕らし得るのみ、余貧神よ説付ら
 れて豈よ當惑せざらんや、乃ち曰く余之假令ひ餓鬼
 とあるも復た貧乏神よ交らず、此事早く夢となれ夢
 と爲れ、貧神曰く否本當なり夢で之無い哩と、余
 再び驚き覺れを又是れ南柯の一夢、一聲高く呼で曰
 く鬼之外福之内、侍重怪み問て曰く、節分未だ至ら
 ず先生何等の寐言を吐る、や、余曰くエ、又失敗た

り○流石の拙者も是れよと閉口せり○友人酔拵つて管と巻さ○一個の醉漢も衝突す○牛と牛連の諺も依て相會し○誰れ憚る所なく○随分氣樂の極点

歎と記して以て太平樂の記と爲す、時又明治某年一月一日なり、

自由堂建立の記

謹んで自由々來記を按ずるも、今を距ること十餘年前、我東洋も新宗教を布く者あり、其首唱者を自由大和尚と云ふ、奮發縣力食國の人なり、其祖身屈上人、澤庵和尚の門も入て壓制教を講ず、其宗頗る熾なり、當時安眠情如來、東縛童子、此陀息子の三体を以て其本尊如來と爲す、安眠情如來の尊像と渾身紅ひも染て火焰時も然ゆ、是れ豪血を壓搾して以て

あり○後腹の痛むと暫く之を措き○歌ふ者あり舞ふ者あり○之を新年艶怪の記と爲す○記して以て記念と爲す○守舊黨の頑々と舊を説み鬚鬚たり○

宮殿を塗も像るなり、其目を閉ぢ益楯として夢の浮橋も立つ者も、年中懶惰も耽つて空々弱々芋の煮たも御存じなきも像るなり、其腹の脹れて布袋の如き者も、坐して豪血を食ひ貪つて饑なきも像るなり、其双脚枯瘦蚊の臍を割が如き者も、腦涸れ神死し倒せば顛覆し易きも像るあり、其左右も立つ東縛童子も左手も細を捧げ、右手も劍を握り身屈病も感ずる者の頂門も屹立す、其右位も立つ此陀息子も、髮立ち目裂け眼光鏡の如く、鋤鋤を荷ふ人の背上也り踏つて噴然たり、此二尊像も本宗の開基威武上人の自作も係り、乃ち人民若し命も從とされを、此陀息子を

鬻ある人之之
を悪み鬻なき
人之之を譽め
○一國の財産
を平均するを
一寸無理に似
たりと雖も○
牛よ騎て善光
寺よ參詣する
が如く○動す
れば腕力よ断

して壓伏せしめ、束縛童子をして捕縛せしむるの尊
像なり、澤庵教即此三尊像を帷幕の中よ安置して以
て宗徒を苛御し、苟くも唯々たらざる者と毫も寛假
せず、直ちよ巨大なる壓石を示して以て一叱咤の下
よ俯伏せしむ、其教科書よ安眠惰經、大煩邪經、暴
氣經、好音經等あり、凡そ此宗門よ入る者と手足を
勞せずして酒肉色よ飽き、人民よ駭るを以て其宗法
と爲す、其己れよ利あると眞宗の僧侶が百遍の念佛
を唱へて以て愚夫愚婦を誑かし、法華上人が萬返の
題目を賣て以て情々夫徒と迷えすの比よあらず、彼
と緘よ信者の布施金を狙ふのみなれども是と萬民の

へんとする勢
○皆是れ腰
抜のみ○頻よ
尻理屈を叩き
○昔日之尻よ
敷れ今日之頭
よ突立ちが如し
○只其勢を見
て逃腰と爲り
○平々凡々の
人よ非ず○才

膏血を絞んと欲するなり、其利の相距ると同年の論
ならんや、故よ此宗門よ入る者よ一時先を争て宗徒
湧が如し、之よ反して卑屈上人と糞擔ぎの家よ生れ、
茅屋の中よ臥すと雖も、煩る才氣あり常よ慷慨涙を
呑んで曰く、澤庵宗の主義と人民の頭上を壓するよ
在り、澤庵和尚も人間なり我も亦た人間なり、同ヒ
く是れ人間よして彼之常よ我を壓し我之常よ頭を伏
す、愚も亦極ると謂之ざるべけんや、天の民を生老
る堂よ偏頗愛憎依怙最負あらんやと、説了ッて涙數
行下る、長ずるよ及んで氣慨腔よ溢れ止めんと欲し
て能えず、遂よ正理の舌鋒を以て澤庵宗門を破らん

子と云へば才子馬鹿と云へを馬鹿○十中の八九人までと臆を潰せり○吾より外よ人間なしと威張○泣見と地頭よと勝べからず○自酒自遊と謂ふべし

と欲す、而るも其宗門未だ衰へず、倒まゝ壓伏せられて身屈上人の名を取り、口は澤庵教を説と雖も心之快々として樂しまず、終に怨みを吞で没す、自由和尙之其孫なり、和尙之氣力活潑非凡の才あり、時恰も澤庵宗衰へて人皆これを惡むに際す、和尙以爲らく時失ふべからず我れ此機に乗じて自由教を布を天下靡然として我が宗門に入らんと、遂に同志の自由徒を率て澤庵山壓制寺の門に攻入す、澤庵宗徒不意を襲れて周章狼狽策の出る處を知らず、和尙大喝一聲罵つて曰く、天の民を生ずる皆同一の權利を賦す、大和尙も人間なり味噌播坊主も亦た人間なり、

○亂暴と自由との方角を取違へ○之を憤懣又堪老と思ひ○活潑か無茶か更に分らす○豈に張倒されて溜らんや○自ら稱して豪傑と爲し○主義を如何と問へ○國

況んや力食人民をや、而るも汝ち壓法を逞しうして膏血を絞り、我儘勝手至らざる所なく人民を苦惱する焉に數百年、故に我れ公衆に代て倒まゝ汝ちを壓せんと言ふ、天下若し坐して膏血を食ひ恣まゝ人權を褫ふも妨げざるの理あらば則ち余も敢て何も言はず、其理なくんを則ち天下復た汝ちをわらしめざるなりと、壓制寺中一人の正理を抗する者なく、悄悄として大伽藍を棄て潰ゆ、自由和尙咄嗟堂より安眠惰如來の首を捻切り、束縛童子を蹴倒し、叱咤息子を打碎き、至勝を収めて凱旋す、實に今を距る二十年前に在り、是れより自由信者天下に蔓延

あるを知つて
身のあつたを知
らず○之が爲
めみ身代を棒
又振り○何の
關するとか之
れ有らんと○
尻押の強きが
爲め○敢て
びくともせず
○武士と食ね
と高楊枝の有

し壓制跡を収めて自由頭と擡げ、和尙の名行處も鳴り
り到る處も聞へ、其宗徒之忽ち三千五百萬の多きも
至る、初め和尙の自由教と布や、千辛萬苦幾難難と
管ひ、當時人民徒自由の二字も惚れ、曰く遊蕩も耽
つて身代を棒又振も自由なり、曰く亂暴を働ひて國
安を妨害するも亦た自由あり、曰く金を借て返さ
るも亦自由あり、曰く寐轉んで居て大飯を食ふも亦
自由なりと、此贖宗徒或之馬鹿者を煽動して彼是七
面堂を築き、或之良民と誑して亂痴機騒堂を建て、
自由の異教と殆んど將又信を失とんとぞ、是又於て
和尙八百方奔走し町寧又説論し、竟又贖宗徒をして

様よして○人
の苦み之三年
でも辛抱する
と云ふ事を聞
て○昔しと眠
權家かと云ひ
今之本當の民
權家○第二の
佐倉惣五郎○
尻も帆を掛て
飛出し○曰く
狭い哉尻の穴

氣焔を逞しふするに至らしめせ、而して鎮定せり、
今や自由の眞教正道も行これ、和尙の鼻天狗も化せん
として其名益々高し、今年今月今日自由宗徒等、自
由本堂を大都會に建立して以て益々宗旨の基礎を鞏
ふせんと欲す、其堂や結構壯大伽藍堅牢、自由成長
の喬木を削つて以て柱と爲し、正義一幟の巨石を敷
て以て礎と爲し、滿腔の熱血と瀉て以て壁を塗り、
百餘の努力を致して以て門を築き、宗徒子の如く來
り日からせして之を成す、其棟宇之巍々然として聳
へ峨々然として秀で人をして覺へず敬伏せしむ、而
して其本尊之憲法如來自由菩薩權利薩陀を安置すと

と○五大洲を
丸呑みする息
込○或は狂人
と呼れ或は白
痴と云これ○
其様事よと些
とも頓着なく
○或人問て曰
く是れ何の了
簡ぞやと○先
生と鼻で待遇
のみ何とも答

云ふ、自由真教の益々明光と發するや疑ふべからず、
固て自由堂建立の記を作り以て表す、

馬鹿の説

馬鹿と何ぞ所謂たわけ是れあり、昔し秦の趙高な
る者鹿を二世皇帝又獻じて曰く是れ馬なりと、二世
當時之を馬とす、故又後世愚物を指して馬鹿と云
ふと、知らず果して具か、余之敢て是等の古事來歴
又聞せず、馬鹿を馬鹿として以て馬鹿の何たるを説
ん、何となれを馬鹿の言たる到底馬鹿又外ならざれ
ばなり、鄙歌よ曰く馬鹿がありやころ利口も分ると

へず○脈力の
強きと所謂圖
々敷なり○文
明の父開化の
母○是が即ち
蚊鳴怪化○身
を棄て而る後
よ浮びしなり
○若し之を維
新前も行なと
しめむ○鼻屈
連中の脈玉を

此語洵も然り、玉無くんを何と以て石を知らん、銀
無くんば何を以て鉛を辨せん、宜なる哉馬鹿のつて
而る後又利口の出るや、併て此馬鹿の二字之之を如
何なる人物又與へて然るべきか、余が此の如き論題
を擔ぎ出し來るの趣意を全く此一点に在つて存す、
君彼の百姓を看よ朝又糞桶を荷ふて田圃の間よ往來
し、夕べ又麥飯を食て藪屋根の中よ寢起し、日待の
遊樂之意又粒々の辛苦を償ふ能はず、以て馬鹿と爲
さんか、曰く否な、又彼の工商を看よ常又倅氣者流
の肌合を學び、在れを在るも隨つて決して宵越の錢
を遺さず、故を以て一旦病も罹れを凍餒看々妻兒よ

抜き○按摩よ
 非すと雖も一
 針を頂門よ加
 へて○初めて
 民劍を振舞す
 よ至れり○亦
 た悦ばしから
 すや○是より
 餘山で踊も亦
 た泳ぐよ至れ
 り○是れ其お
 蔭なり○同く

及ぶ、以て馬鹿と爲さんか、曰く未だし、衣服を論
 せす徳を構えず笑ふかと思へを泣き泣かと思へを
 悲しみ、食ふ時よ一時よ一升の飯を食ひ、飲むと
 きよ一時よ一斗の水を飲み、賞せらるるれを喜び笑
 てるれを怒り、氣狂の如くよして氣狂よあらざる者、
 以て馬鹿と爲さんか、曰く然り是れ誠よ馬鹿と爲す
 べきなり、然れども余の所謂馬鹿なる者よ之非る者
 り、宇宙之大なり天下之廣し、馬鹿と稱する者豈よ
 獨り此よ止まらんや、若し此よ止まれを余之復た此
 陳腐の論題を用ひざるあり、今夫れ聶之那破翁よ擬
 し而を華盛頓よ摸し、豊太閤を氣取て大言を吐き、

四千萬人中の
 人と雖も○智
 識足ざれば則
 ち馬鹿あり○
 親も手固摺り
 親類も面を探
 め○猶是れ味
 噌の中石の
 如し○瓢手々
 々跳出して何
 れの處よ到る
 を知らず○馬

漢の高祖を真似て自ら尊大よ構へ、辯を蘇張富婁那
 よ比し、智を正成孔明よ較し、取て己れを謙せず敢
 て人に譲らず、一面之即ち聶公紳士の如く一面之却
 ツて百姓商人の如く、常よ熱を吐て曰く蚊迷怪化の
 人と天下獨り我あるのみと、而して其内襟を問へを
 一文の錢あるよわらず一片の學あるよわらず、目と
 節孔の如く鼻と是れ糞桶の糾通しのみ、此馬鹿や己
 れが常よ人を馬鹿よせんと欲す、馬鹿の中よ就て最
 も惡むべき者、請ふ世人能く馬鹿よ鑑み以て馬鹿の
 輩よ馬鹿よせらる、勿れと云ふ、

鹿多れば利
口が却て馬鹿
と爲り○女郎
又欺されて鼻
毛を伸し○私
筒子と摘まれ
て有頂天と爲
り○味噌の臭
さを知らず○
糞の色を見分
る能はず○世
間を廣し其類

放屁の説

或人の狂歌曰く、屁を放れをお腹が空て氣がこれ
て尻の埃も取れてさつぱりト穿てる哉言や、蓋し屁
なるもの之食物の消化糞尿の子分として造化組織の
至微至妙なる者なり、其物たるや形も無くして聲も
り、尻より出て其香ひ鼻入り、芬々として以て一
時の快を取るも足る、實一箇の妙具決して嫌悪擯
斥すべき者よとわらざるなり、然り而も世の頑愚
者流或之以て不敬と爲し或之以て汚穢と爲し敢て其
徳を言はずして却つて其失を擧ぐ、一座談笑の際、

も亦た多し○
其種類之一二
よして足す○
之を博物館中
又置を極上等
の参考品なり
○醫者も首を
擦つて薬又困
り○論より証
據と即ち此
事なり○兩付
て立派よして

傍人一屁を放てを目するも卑奴を以てし指も無禮を
以てし、嘲諷設毀罵詈訕ならず、何ぞ其道理の間違
ひたるや、夫れ人の放屁あると猶ほ龍の火焰を吐が
如く、彼之猛火を吐き是之臭火を吹き、彼之其口よ
於てし是之其尻よ於てす唯大小の差あるのみ、然ら
ば則ち放屁の尚とをざるべからざるは吾人何ぞ疑て
んや、且夫れ鄙言も出物腫物と處を嫌とせと云ふ事
あり、是又由て之を見れを之を父兄の面前も放つも
固と妨なせ、之を主人の鼻の頭に放つも亦た苦玄か
らず、法術の門廟堂の上亦た其處のみ、何爲ぞ遠慮
會釋を要せんや、嗚呼放つべき哉屁や、放つを恥て

其實之然らず
 ○之を是れこ
 けおさかした
 云ふ○拾も田
 圃の案山子の
 如し○世も云
 ふ少しくお目
 出度人物なり
 ○人の癖を見
 て吾癖を直す
 又如す○嗚呼
 可笑哉嗚呼可

睡を尻よし以て之を忍ぶ者と固より大馬鹿のみ、不
 幸にして一朝誤つて尻を放てて忽ち聴者でない
 嗅者の嗤笑を蒙り、赧然掩ふ所を知らず、寧ろ公然
 大音を放ち以て嗅者の嗤采を取るゝ孰與ぞや、余之
 を或る醫者も聞ふ其意概ね前の狂歌と同じ、曰く人
 生養生の大要と放屁あり、消化の功これが右も出
 る者なしと、其れ或之然らん余素より放屁の癖あり、
 近ごろ大屁を發して感あり記して以て臭を江湖も分
 つ

戀の字の説

哀想なる哉○
 聊か鑑みる所
 あれ○狂句も
 曰く屁と尻も
 出て又鼻も逆
 戻り○尻経
 又曰く放たり
 嗅だり屁たる
 分子あり○臭
 い物身知らず
 と之れを是
 れ謂ふよ非也

戀之癖物なり、意馬心猿を魅して狂奔せし
 むる者なり、戀と元來人の惡念なり、唯其惡念あり
 故に婦人又係て道徳を破り身代を潰し、其甚だしき
 と大切の命を棒振又至る、然るも古人獨り色を咎
 ひる者と抑も誤れり、色と國を傾け城を傾けるの符
 力ありと雖も、戀即ち癖物の手引あるも非ざるより
 と未だ曾て亂痴機を働かず、由て視れば戀之本なり
 色と未だあり、古人の野暴ある未だ此理を解せず、其
 本を括て其末を咎め終り貴重なるの色を害物社會よ
 投せんと欲す、何等の誣言ぞや、請ふ試みよ戀の字
 義を辯せん、戀の義たるも慕ふなり念ふなり、故に

○ 尻を以て蠟燭の火を注ぎ
 あり○誰か之を咎めて鼻を
 摘む○吾れ其音を聞て未だ
 其形ちを見ず○是を尻から
 出るの幽霊と稱するも何の
 不可かわらん○尻を放て尻

戀慕戀慕着戀念眷戀等の熟語あり、而して忍ぶ戀途戀別る、戀等種々の戀あり、其戀の夥さ三味線の馬の能く乗去べきよ非せと雖も、之を要するよ美人の顔を一瞥して忽ち其姿色の艶あるよ惚れ、且つ葦ひ且つ念ひ忘れんと欲して能はず遂に不了見と起すの類よ外ならせ、偶々相惚主義よ係り互ひよ色目を以て電信よ代る者ありと雖も、其極や亦以て浮氣を流すよ足るのみ、戀の癡物一旦狂ひ出して色の本道よ悖らざる者之甚だ罕なり、粹學先生の窮理よ據れを戀之多量の磁石力を含蓄すと云ふ、故よ男女の別よ拘らせ我れ先づ癡物を發すれば早晩他と吸引す、其

を閉めるとと後悔の謂なり
 ○若し之をし
 て癖香の如く
 ならしめむ人
 争ふて之を嗅
 ん○宜なる哉
 人之を非禮と
 爲すや○上品
 の人よと決し
 て無し○宜し
 く其所よ於て

將よ吸引せんとするや父母の拒むを聴かず朋友の諫めを用ひせ、鉄壁も鑽るべく殿門も破るべく、醜名汚聞固より省みる所よ非ず、遂に精着して媒妁入らずの夫婦となる者、家鴨の合翼より多し、然れども戀慕をべからざる者よ戀慕して強て慾情を遂んと欲する、遠藤武者の袈裟に於る師直の顔世よ於るが如き者と癖物よ非されを爲すべからせ、深窓の處女よして裏店の野郎を戀ひ馬丁の身分よして貴紳の奥様と戀ひ、貴紳の親玉よして柳巷の怪獸を戀ひ柳巷の怪獸よして芝居の座頭を戀ひ、其不適當の戀をなすよも拘らず、竟に能く粘着する者と亦た不可思議よ

すべし○慎ま
 ずんばあるべ
 からず○人よ
 して情慾なく
 んを木石よ異
 ならず○人皆
 是れあり只其
 深淺の別ある
 のみ○黄鳥と
 耦を追て花間
 よ戯れ胡蝶と
 配を覓めて庭

非せや、是れ即ち癖物の名ある所以か、戀の物たる
 往々粘着すべからざる者よ粘着して人を驚かし、彼
 の野郎が何して彼の美人を説落したかど云としむる
 者亦た曾て少なからず、其粘着すべからざる者が尙
 ほ粘着すると則ち戀の癖なり、況んや粘着し易き者
 よして粘着せざるを得んや、藝妓の客よ粘着する
 と固より商賣なり故に論せず、權助のお三よ於る居
 いのお娘よ於る、後家の後見人よ於る書生の揚弓女
 よ於る、料理番の樓婢よ於る比丘尼の番僧よ於る、
 私窩子の濫買よ於る後室様の家令よ於る、女按摩の
 獨夫よ於るか轉婆娘の伴當よ於る、手屢々觸て豈よ

前よ舞ふ○鼻
 糞を丸めて製
 する所の丸薬
 と吾れ其萬金
 丹なるを知り
 守害を黒燒よ
 して製する所
 の散薬と吾れ
 其惚薬あるを
 知る○古人曰
 く英雄色と好
 むと是れ強ち

粘着せざるを得んや、况んや言を以て之を説き手を
 以て之を挑むよ於ておや、其粘着せざる者却つて不
 思議と爲すなり、故に此等之思案の外よ非せ即ち理
 の當然なり、唯其粘着すべからざる者よして粘着す
 る是を戀の癖物と謂ふ、而して粘着すべからざる者
 よ粘着して醜聲を流さる者古來曾て之れ無し、天
 下若し此癖物を絶む男女粘着の弊自から地を拂ひ一
 夫一婦の道も亦た興るべきあり、然るよ我邦俗間の
 弊風として父母より此醜事を導く者あり、父母より
 醜事を導くと何ぞや、曰く我戀と細谷川の丸木橋
 と謠としめ或之夏の夜の夢をかりなる手枕よなど、

我田へ水を引
 の論も非也○
 門よ於るが如
 く古來其例よ
 乏しからず○
 請ふ君野暴の
 口から意氣過
 たど笑ふ勿れ
 ○若し之れ無
 くんを造物の
 罪人のみ○耳

唱へしむる即ち是れなり、既又此指南あり癖物の愈
 く出て愈く乱痴癡を働く亦た豈又無理ならんや、尤
 もなる哉尤もなる哉、

燒餅論

燒餅と如何なる處より出たる熟字なるか、余之其
 原語の起る所を詳らかにせず、文選の恨みの賦と數
 千言の長さよ及ぶと雖も、未だ燒餅の文字あるを見
 ず、康熙字典英和字彙も無し、依て按ずるも餅と
 其質至柔なり、而して之と燒を則ち焦る、周易の國
 字解又曰く、坤之女とす其性真綿と同じ柔かよして

糞をほちくつ
 て之を聞々○
 自分ながら娛
 迷説と信ず○
 諺に曰く戀よ
 上下の隔て無
 しと○旨い哉
 言や○是又於
 てか在于○是
 れ儘な証據な
 り○都一よ
 曰く酒と女が

締りありと、又大般若經の譯文又曰く、瞋慧の焰よ
 身を焦す、其註又曰く瞋慧と吝氣なりと、是又由て
 之を知る婦人の怒ると即ち餅の燒るが如くなるより
 遂又此稱あるとを、然らと即ち婦人の餅を燒と其常
 として咎むべからざる者か、曰く餅と燒べからず之
 を燒を情を傷る、而して又燒ざるべからず燒ざれを
 趣きなし、餅と唯其れ燒方の上手下手あるのみ、
 善く餅と燒もの之男子をして道樂を爲すと能としめ
 ざるに至るを以て主とす、拙き者と男子をして益く
 道樂と増長せしむ、則ち餅を燒と豈又其れ容易なら
 んや、某所又善く餅を燒く者あり、其良八年三十餘

若しなないから
 を生て此世も
 用とないとい
 狂歌よ曰く樂
 後よ柱前よ
 酒左右よ女懷
 ろよ金と○只
 溺れると溺れ
 ざるよ在るの
 み○溺るれを
 身を亡し溺れ
 されと身を立

頗る夜遊びを好む、竊かよ其行く處を探れを始めて
 麥湯或は揚弓店の間も徘徊し終りと横町の小格子の
 内も潜伏す、細君其圍ひ者を調べるも十八九の少女
 なり、因て一策を設け急も近傍の桂庵に至り、其連
 名簿を檢するも十二歳一ヶ月より満十五歳の者七八
 名あり、中よ就て尤も容顏の美麗なる者を擇び月給
 を問へむ七圓と云ふ、細君乃ち其衣裳を質し置て之
 を聘し、良人の他出せし日を待て之を家よ入る、本
 日良人例の如く夜深に酔ひ歸り室よ入れば忽ち粉光
 目も眩す、處女の顔せ雪の如く襟を揺めて巨燵の傍
 らよ恭座す、主人見一見して心動く然れども細君傍

つ○猶是れ藥
 も過れを却て
 害となるが如
 し○少年多く
 是又因て身
 を誤り○尤も
 頭兀ても浮氣
 の猶止ざる者
 あり○慎むべ
 きと色も在り
 ○決して常談
 くと非ざるな

らよ在り勢ひ未だ俄も相狎るべからず、恰かも魚肉
 組板の上よ在て料理人庖刀を執るとき、老猫隅より
 微眼注視すると一般、細君心裡も笑一笑し徐かよ良
 人よ向て曰く、今夜誠も冷なり殊も主と遠くより歸
 り來る、豈も杯酌無かるべらんや、主人喜んで曰く
 卿と能く寒を防ぐも巧みよして暖を取るも敏なりと
 謂ふべしと、因て酒數杯を傾むく然れども唯獨り連
 飲するのみ亦未だ俄も處女と献酬すべからず、唯時
 々細君の面を視て其機嫌を窺ふのみ、細君主人の稍
 酔を帶るを待て徐かよ處女よ向て曰く、姉さん幸ひ
 よ主公の杯を休めよと、少女と一聲ハイと返辭して

り○苦あれを
 樂あり樂あれ
 を苦の來ると
 を記臆せよ○
 火訓又曰く雷
 の灼ゆると猶
 堪べし焼餅の
 焦るゝ忍ぶべ
 からずと○先
 づ余が論ずる
 焼餅論を聴け
 ○主人細君を

主人よ向ひ、頭一低し葱の白根の如き細やかなる手
 を差出してお酌を乞ひたり、初鷲林も移る老樹も
 亦春ならざるを得んや、主人満面も笑を發し汝も能
 く吾が大杯も堪るやと云へむ、素より桂庵簿中も名
 を投ずるもの皆一騎當千の覺へあるも非ずんを争で
 か相手嫌ぬ大戰場も向ひ得んや、然れども少女と
 面上故らも微紅を作す、細君傍らより口を出して曰
 く、姉さん既も頂戴と云ふ何ぞ杯の長大を怖れんや、
 良人早く其望みも應じ給へと、是も於て主と即ち杯
 を投じて膝に送り女受て飲み再び之を主人も酌ふ、
 主人又飲で之を細君も傳ふ、蓋し暗も煤灼の恩を謝

呼んで曰く余
 と是より某處
 へ行ん宜しく
 其支度をすべ
 しと○衣服と
 粗末なるべか
 らず○方角と
 素より悪しと
 雖も○細君急
 又色を變じ双
 角忽ち出づ○
 初めと言語を

するも似たり、頃くして夜も稍深きも赴き妻君寝を
 勧む主人既も少女に十分の眷戀ありと雖も妻君の
 面前も於て豈も能く一語をも發し得んや、且つ俱も
 房も入り去る、然れども主人の呻吟して寐ると能と
 せ、細君曰く良人今夜何を苦しんでか此の如くなる
 や主人答ると語らず唯數聲の嘆息を爲すのみ、細君
 曰く呼妾これを知れり、良人の心彼の少女も属する
 も非ざるを得んや、主人羞縮して曰く誠も尊命の如
 し、細君笑つて曰く良人既も心あらば妾豈も之を妨
 かんや、抑も妾も一説あり良人且つ熟聴せよ、凡そ
 男子年三十を過ぎ貴さと亭主たり富み一家の内を保

以て争ひ終り
 と腕力と爲り
 ○亭主と酢と
 云ひ女房と
 顔と云ひ○播
 木羽を生じて
 空み飛び播益
 足を生じて臺
 所又跳り○其
 音ガタピシヤ
 然たり○或と
 疑ふ雷様でも

つ、而して猶ほ大道の麥湯を飲み揚弓店の少女と戯
 ると抑も何の心ぞや、妾と敢て尋常の格言を吐く
 ん非ず誠ま家を思へばなり男子の水性なると男子の
 常なり妾豈も咎めんや、唯亭主と宜しく亭主の地位
 あるべきなり、晩酌のお伽小婢と一二を蓄ふるも亦
 何の不可なるとか之れ有らん、妾と決して争ひを祗
 席の間又拵ゆるの意あるとなし、今夕敢て君の少女
 ん遇ふを沮まず、良人往けや勉めよやと、主人慚汗
 雨の如く淋漓額も流る、唯恐縮々々と連謝するのみ
 なりしと云ふ、余因て按ずるも此細君の如きと誠も
 其心公明正大にして彼の他の女を何斯すれを必らせ

落たるかど
 女の一念と實
 ん恐いものよ
 て清姫と蛇と
 爲り累と化て
 出で○亭主と
 到底不平不満
 不興不快不氣
 濟不同意よし
 て千百の不の
 字五臟六腑よ
 輻湊し○亭主

執着の鄙念ある者と同日の比も非ず唯其能くこれを
 弛むると即ち之を締むる所以、亭主却て一塵息を出
 すと能はず、唯細君の指揮を仰ひで僅も一月撤回の
 遇を得るのみ、是れ尤も焼餅の上等なる者にして尋
 常婦人の能くする所も非ず、抑又た大奸と忠義も似
 たり大徳と柔順も似たるものよしして測るべからざる
 の神辨あるものか、何れ致せ一家の主たる者と鑑み
 ざるべからず、

似て非ざるの論

と出さき去り妻君
 と只益槍とし
 て時計を敷へ
 其音と共みち
 ンくたり
 焼と爲て焼芋
 を噛れば尻頻
 ん出で○恰も
 轆轤首の水を
 求むるが如し
 ○主人の歸る
 を待て問て曰

小便の色と味淋又似たり、然り其色似たりと雖も小便を以て味淋に代用すべからず、糞の質と味増又似たり、然り味増又似たりと雖も糞を以て味増に代用すべからず、酒薦を被と爲して橋上又臥し豊太閤の賤時を氣取て自ら英雄なりと謂ふも、其勇氣と蜂須賀を壓する無さを奈ん、一劍腰又帯て山中又入り漢の高祖の微時を真似て自ら豪傑なりと誇るも其豪氣白蛇を斬るなきを奈ん、嗚呼天下似て非なる者滔々皆自然らざるとなし、牛董の假面を被り邊理の假屋を使ふ者これを似非學者と云ひ、八字の美髯を蓄へ山形の高帽と戴く者、これを似非紳士と稱す、狐性

く良人何處
 を何廻つて歸
 り来るや○角
 を押立て七八
 時間の溜息を
 一度又とつと
 吹出そ○双角
 三千丈怨みよ
 因て此の如く
 長し○互ひよ
 契約の証語あ
 り君と比翼連

權君の夫人又似て風姿婀娜たるも自から非なる所あり、馬骨處女の淑女又似たるも舉動輕率自から非なる所あり、僞民權家と外面志士又似たるも精神又至つて之則ち非なり、詐道德者と行爲君子又似たるも心術又至て之非なり、鉛刀の皎々たる正宗を欺くも實又一割の用なく、鍍金の灼々たる純金の如きも却つて眞鍮の質あり、此の如く數へ來らむ社會上の事又物又と皆似て非なる者又あらざるとなし、呼で似非社會と云ふも亦た可きなり、偶々感ぜる所あり終も似て非ざるの論を作る、

煙草論

理と保し妾と
未來永々と證
せり○今よし
て情を失ふ○
余の家事よ非
されを外出せ
す○男女同權
の論と謂ふべ
くして行ふ可
らず○余の主
人の最負をす
るよ非すと雖

煙草を嫌ふ者あり一日余又謂て曰く、君の煙草と好
むと果して是れ何等の了簡ぞ煙草と俗よ阿房草と云
ふ阿房の名最も當れり、我れ曾て醫者よ聞よ曰く、
煙草と害あつて益なし、煙草の毒これを猫珍と稱す
猫珍又中れを必らず死すと、我れ敢て忠告す君其れ
之と慎め、余謝して曰く果して然るか、然りと雖も
も僕未た之を廢すと能はず、蓋し世間の事一利あれ
を必らず一害あり一失あれば必らず一得あり、蒸氣
船能く大洋を渡るも未だ淺灣を渡るを得ず、電信線

も○男子と交
際の爲よと女
郎も買ひ藝者
とも戯る○夫
が蒲山しけれ
を男よ生れ代
つて來るよ如
す○針で突た
程の事まで向
ふ三軒兩隣り
を騒す事あり
○豈よ馬鹿々

と能く消息を通ずるも未だ書札を通ずるを得ず、只
利を利として之を取り害を害として之を捨るべきの
み、余の煙草を廢する能とざるを偏よ之を以てなり、
蓋し煙草と無味の烟よして砂糖の如く其れ甘きよ非
ず山葵の如く其れ辛きよ非き、若し煙を以て之を云
へむ、薪の煙炭の煙も皆吸ふべきなり、然るよ之を
して吸ふべからしむる者と煙草の煙草たる所以なり、
蓋し煙草の徳と一よして足らず、談話の際、黙考の
際、困難の際、倦疲の際、書を讀の際、詩を思ふの
際、客よ接するの際、人と遇する際、落語を聞の際、
回し床よ寝るの際、掛合を爲すの際、談判を始むる

々敷次第なら
 老や○故は日
 く疝氣と男惱
 む所焼餅と女
 の懐ひ所と○
 古人焼餅女房
 の爲ふ之を謂
 ふ○似て非な
 る者と枚擧よ
 追わら老○請
 ふ先づ其一二
 を擧て示さん

の際、煙草を好むの人よして煙草無ければ其手持無
 沙汰なる凡そ如何ぞや、君と煙草を好ま老故も其手
 持無沙汰なるも嘗てや、塵の塵を撚らざれば必らず
 其塵を撫づ、煙草を好む者之身を害するの恐れある
 かと知らねと煙草を嫌ふ人の如く物を害するの憂ひ
 と無し、利害得失と到底免かるべからざるなり、且
 つ煙草と無味ありと雖とも其無味の味ひや言ふべか
 らざる者あり語るべからざる者あり、煙草の一喫し
 て忘るべからざる何ぞ必らずしも阿片を俟んや、故
 ん君の忠告を僕敢て之を謝すと雖も、然れども僕未
 だ煙草と厭する能とざるなり、且つ君と煙草と嫌ふ

○豈も管ビ一
 ルと馬の小便
 のみならんや
 ○試も思へ權
 妻の奥様も似
 たるお轉婆娘
 の私窩子も似
 たる○孔子の
 曰く紫の朱を
 奪ふを惡むと
 ○猿人間も似
 たるか人間猿

の人僕と煙草を好むの人、恰も下戸と上戸と魚屋と
 八百屋との如し、其論の合ざるや亦た宜なり其害を
 云へを煙草と是れ人體の毒其利を擧れを煙草と是れ
 慰心の藥、猫珍の毒草、未だ其緩劇を知らずと雖と
 も之を思ふも其害と其益も如ざる者の如し、君其れ
 之を諒せよ、其人又何事をか云とんとす、然れども
 余と煙を吹て履みず別て後之を記す、

柿の辨

柿は種々の名あり、世人皆能く之を知る余亦た何を
 か贅せん、然れども其種を問へを只僅も二個の區別

よ似たる余と
 之を知らずと
 雖ども○只上
 邊の似たるを
 以て信せべか
 らず○然れど
 も世俗多くは
 其外面の美な
 るよ迷ふ○余
 と其何の意た
 るを知らざる
 なり○誰か煙

あるのみ、何ぞや甘き者と澁き者と是れなり、甘き
 と澁きとの柿の實を就て人將に何れを取らんとなす、
 甘き種を取らんか澁き種を取らんか、食慾と人情の
 得て免かれざる所、十中の七八を應に其甘き者を取
 るべし誰か亦た其澁きを取る者あらんや、何となれ
 るに其甘き者と我利々々然と直ちよ之を嗜るべきも其
 澁き者之面を皺め舌を敲き嗜一嗜するも到底其糞を
 して詰らしむるに過ぎれをなり、柿か柿か柿の甘澁
 を撰ぶ者余大概其の澁き者を棄て其甘き者を取るを
 知る、何ぞ其れ誤れるの甚だしきや、試みよ思一思
 せよ柿の甘種甘きと則ち甘えと雖も豈よ一の効能あ

草と養生よ書
 ありと云ふか
 ○阿房草とと
 阿房の言なり
 ○若し夫れ煙
 草を以て身体
 よ害ありとせ
 を煙草香と皆
 早く死する筈
 なり然るよ八
 十九十の老人
 よして猶煙草

らんや、然るよ人の澁種を置て先づ甘種を取るに其
 直ちよ之を嗜るべきを利とする者よして所謂目前の
 慾よ傾く者あり、澁き種と然らず、甘き種の如く直
 ちよ嗜一嗜すべからざるも、之を嗜よすれを樽柿と
 爲り、之を干を干柿となる、甞よ樽柿干柿となるの
 みならず、之を製すれを澁となる其用や言ふべから
 ざる者あり、苟くも將來の利を思ひ異日の益を圖る
 者、誰か亦た澁しとして之を乗んや、其甘き者を措
 て澁き者を取るや必せり、請ふ一步を進めて之を再
 思せよ、今夫れ我が國人の赤髯兒碧眼奴よ於る貿易
 上常よ巨大の損耗を醸し、無々無し金の銀を撈る

を呑と果して
如何ぞや○上
戸之酒を薬と
爲す下戸と國
子の胃又障る
を知らず○我
田へ水を引を
各其理あり○
近來の醫説よ
曰く煙草を喫
する者と虎列
刺病を免かる

、と果して何又因て然るか、蓋し目前の小利も走り
て將來の事を考へず、無暗無法なるを我が國人の性
なり、外人之之より異なり氣長より前途の里程を數へ、
而して後取て進む、之を譬ふるに我國人と甘柿を好
む者の如く外人と澁柿を嗜む者も似たり、其常より利
益を占めらる、豈も亦た宜からずや、蓋し柿の國音
と搔たり是れ頭を搔の謂か、柿の甘澁其利害を辨せ
せして可ならんや、聊か感ずる所あるつて柿の辨を
作る

可樂の辨

と○贅物とと
恐らく税物の
誤りあらん○
之を廢せんと
欲する互に習
慣と爲て廢す
べからず○况
んや無理も廢
するより及む
ざるより於て
や○面を洗つ
て出直すべし

人各々樂み無かるべからず、而して某樂みとて勉強
之れ友として情欲の果を結ぶを樂むなり、故も若し
勉強を後よして娛樂を先よせむ其樂みと變じて苦し
みと爲る、豈も油斷すべけんや、抑も苦樂と表裏を
本として一躰、譬へば晝夜寒暑の如く飽飢醒睡の如
く必らば一方より久しかるべからず、但し諺に曰く樂之
苦の種苦と樂の種と、蓋し格言なり、故も樂まんと
欲すれば必らず先づ勉強せざるべからず、勉強せん
と欲すれば必らず先づ苦心せざるべからず、是れ苦
樂相待て一体を爲その實證なり、然り而して謂ゆる
樂みなる者と貴賤貧富老幼男女各々其趣きを異にし

○加賀の千代
 曰く遊からう
 かと知らねど
 柿の初契りと
 ○諺よ曰く貧
 乏み子あり山
 柿又核ありと
 ○外部の美な
 るを見て之よ
 迷ふと勿れ○
 ○老人の言實
 り空しからせ

て又其様の同ふせず、然れども衣食住を以てす最極
 と爲すと皆一なり、而して此三の者を得るよ必らず
 労働辛苦堪忍勉勵の後よ在り、請ふ彼の車夫馬丁の
 輩を見よ、昨天狄羅の立食焼酎白酒の立飲と必らず
 終日馳驅し流汗珠を綴るの後よ在り、農夫の枯魚を
 炙き濁酒を温めるの樂みと耕耘鋤風に櫛り粒々辛
 苦雨に浴するの後よ在り、工商の絹を衣肉を食ひ快
 醉を取るの樂みと甲乙罵詈を忍び彼又此又利益
 を博取するの後よ在り、未だ終日寝轉んで能く其家
 を興す者あるを見ず、未だ每晚遊宴して能く其家を
 失とざる者あるを聞かき、故よ曰く樂まんと欲せむ

○罪人の着る
 衣服よ柿色あ
 り○友人吾よ
 贈るよ柿を以
 てす○遊ぶよ
 必らず方あり
 ○三遍廻つて
 煙草とせうと
 と苦の後よ樂
 するなり○苦
 き時よ苦しん
 で老後よ樂む

必らず先づ勉強せざるべからずと、然りと雖も安逸
 娛樂を好んで労働辛苦を惡むと人の常情なり、徒ら
 り其好む所を制して其惡む所を強むと猶ほ工夫と使
 役するよ呵嘖を以てして恩慰を加へざると一般豈よ
 能く堪べらんや、樂んで働かざると固と不可、働ひ
 て樂まざると又不可、随つて働き随つて樂む是れ人
 間世界の常態なり、凡そ樂みの種類其大略を擧れむ、
 書畫琴棋詩歌俳諧、舟遊觀劇茶道音曲、其他普請を
 好む者あり衣裳を貯ふる者あり、或は美食を好み或
 と佳人を愛する者ある等、人々の氣々又因り千差萬
 別種々雑多、口以て盡すべからせ筆以て盡すべから

べし○老後よ
 苦むと必らず
 少年の時よ怠
 りしなり○勉
 めずんをある
 べからず○西
 人曰く勉強と
 幸福を生むの
 母なりと○平
 氣然として願
 みず○金あれ
 を以て其樂む

す、然れども働ひて資力を得資力あつて此樂みを爲す者も則ち良才子なり腕力者なり誰か感心せざらんや、世も吝嗇漢守銭奴なる者あり、無暗も吝み矢鱈も貪り、細心汲々只蓄財を以て務めと爲し、一生餓鬼然たるが如し、請ふ試みよ其卑吝の魂体を擧て消白人士の一笑も供せん、性甚だ酒を嗜めども自家も購はずして他人の家も飲み、好んで酒樓も上れども勘定の時よ至れを乃ち眠た真似をして高駟を作し我口を愛し我腹を養ふの外と三錢の魚肉一錢の野菜も猶ほ過分と爲し、米價の騰貴を罵つて妻子の食糧を睨み、雜費の多少を詰つて僕婢の菜料を殺ぎ、交際

を盡すべし○
 ○是れ獨立の
 基なり○篤と
 胸よ手を置て
 考ふべし○是
 れ僕一人の考
 へよ非ず○嗚
 呼世渡りも亦
 た六ヶ敷者な
 る哉○決して
 虚言や偽りよ
 非ず○君何爲

義務の出金を厭ひ友生知人の來訪を忌み、饗應せられて報酬を欲ぎ惠贈を受て答謝を怠り、貧者を見て憐まじ飢人を見て救えず、恥なく義なく面皮鐵の如し、然れども一身の利徳よ至て之細念懇到毫も抜目あし、噫夫れ此の如き勉強と勉強よして娛樂と娛樂なりと雖ども、余より之を見れを禽獸を去る殆んど遠からざ、然り而して世も其人多し、豈も憫笑せざるべけんや、

二 堅と追ふ文

此の文は、堅と追ふ文の二篇を指す。堅とは、堅固、堅忍の意。追ふとは、追いつく、追いつめるの意。この二篇は、作者の自叙傳的なもので、その人生の歩みと信念を述べている。

れぞ勉めざる
 ○遠き考へ無
 ければ必らず
 目の邊に泣と
 あり○苦樂を
 手の裏を引繰
 返すが如し○
 風の神は舞込
 れ○人之病の
 器とと嫌な言
 草なり○逆も
 腕突よと及む

世人動すれを曰く、疾病の數算し來れば四百四種あり、然り四百四種ありと雖も而も貧より苦しき者と未だ曾て之れあらずと、嗚呼是れ何の言ぞや、思ふは是れ貧乏社會が借金取は謂譯するの言草のみ、諺云とすや稼ぐは追付貧乏なしと、凡そ貧乏なる者と自ら招くの禍ひよして決して外より來る者よと非ざるなり、疾病と然らず命數盡るの期よ至れを天我と奪ふ、此時よ及んでや縦ひ扁鵲よ起死の術ありと雖も平文又回生の能ありと雖も、藥の得て救ふべき所よあらざるなり、試みよ彼の塵も積れを山と爲るの語を思へ、貧乏何れの時か富貴となるの期莫か

す○相撲取も
 病の爲よと負
 る○況んや風
 が吹を飛やう
 な人間よ於て
 かや○只ウン
 く○と迂鳴の
 み○食氣進ま
 すと雖も鰻井
 ならを容易く
 一碗を空よす
 ○友人問て曰

らんや、金銀之天下の融通物なり其得ると得ざるどと只稼ぐと稼がざるとよ在て存ず、噫貧乏と思ふるも足らず只疾病是れ懼るべきなり、今余が憂ふる所の風邪なる者と四百四病中最も治し易き者、然れども一旦其用心を怠り之を四五散せを化して他病と爲り、増長すれを人をして遂に起ざらしむるよ至る、夫れ人と猶ほ時計の如く疾病と猶ほ塵埃の如し、塵埃一たび時計を侵せを時計と忽ち狂ひ疾病一たび身體よ發すれば身體忽ち便ならず、故よ一つの腫物も一ツの傷所も決して之を馬鹿よすべからず、大事の前的小事之を馬鹿よすれを其極や身躰を損じ性命と

く子の病之何
 病ぞ○答て曰
 く花風病なり
 ○蒲團短くし
 て足を出し○
 綿薄くして身
 甚だ寒し○
 醫と鹿爪らし
 く診一診して
 曰く○水薬と
 葡萄酒を飲の
 類も非き○其

誤る者往々これ有り、二豎々々汝何爲ものぞ、肺
 も胃も腦も眼も、手を換へ品を代へ以て人を惱す、
 人を惱す之尙可なり或之虎列刺となり或之麻疹と爲
 り質布斯と化し馬皮風と變じ、毒を社會に逞しふし
 自由自在に貴重の人命を奪ひ去る、汝ち二豎眞に惡
 むべし、然りと雖も世自から醫藥のある在り、其法
 日よ開け其術月よ進み、今日之昔時の如く草根木皮
 を煎じ詰るを用ひず、一瓶の水薬汝をして舌を巻て
 畏れしむべし、世間往々汝の爲め誤らるる者多く
 と是れ用心に至らざるの故なり、我よして苟くも用心
 を嚴よせむ汝ち二豎如何も猛惡と極むと雖も亦た何

の味ひ澁くし
 て且つ苦し○
 誤大層を云ふ
 も非ず本當の
 となり○益槍
 すると茲に一
 週間○古人歌
 を咏して雨を
 降せり吾と則
 ち文を草して
 病を拂ふ○只
 別嬪の心配す

事をか成し得んや、汝ち今風邪と化し來り三日間我
 を蒲團の上よ苦しましむ、然れども我命數未だ盡さ
 る以上之鶏卵酒三杯を呑み夜着を被つて汗を取らむ、
 醫者を勞する迄もなく汝ちを追ふや難からず、貧乏
 固より憂ふるも足ら老稼げを富貴と爲るべく疾病畏
 るべしと雖も用心すれを恙なし、汝ち二豎其毒を逞
 しふせんと欲するか、我よ防禦の術あり決して汝を
 して其志しを恣ま、よせしめざるなり、汝ち二豎速
 かよ去れ、去れを好し若し敢て不の字を云ふ、我
 と醫者を頼み一劑汝を驚かすの妙薬を調合し來り汝
 をして避る所なからしめん、汝ち二豎猶ほ去らざる

か早く去て一驚を吃するを免かれよ、

三味線を戒むる文

るを如何せん
○薬の直段と
九層倍と云ふ
其功能も亦た
九層倍なるや
否や○仇文句
と繪草紙屋の
店を填むと雖
も○文盲を陶
治するの力な
く○貞操を教
訓するの力な

汝ち三味線よ、汝之猫の皮を以て面の皮と爲すと雖も、ニヤン／＼能く語を解するの紅唇あるよ非也、汝ち三味線よ、汝之名木を以て胴腹と爲すと雖も、念々能く事を慮かるの赤心あるよ非也、浮氣の駒よ三筋の手綱を結び戀の重荷を載せ去るも車を挽き物を運ぶの能あるよ非也、其長所之唯象牙の撥の當り加減を以て遊治郎を調子よ載せ、意氣な二上り三下り上てと下し下してと上げ、終よ其身代三下りたら

く○春雨よし
つばり濡ると
謠ひ○四ツ谷
で初めて逢た
ときト迂鳴り
○いろ／＼いろ
とノ師匠と爲
り○戀路を導
き○益／＼深海
又迷ひ込み○
夫りや聞へま
せん傳兵衛さ

しむるよ在るのみ、音樂の要と人心を和ぐるよあるも人魂を銘すよあらず、汝ち三味線と巧みよ堅氣の息子を浮氣よ導き深窓の生女を遊樂よ誘ひ、梅の春を唄へども黄鶯の好音あるよあらず夕暮を唱ふれども都鳥の風韻あるよ非也、汝之有害無益の長物なり我れ汝又重税を課して淫風の媒介を防がんと欲すれども汝之校書の辨茶羅を載て髯公の鼻毛を數み、無理な願ひもコロ／＼と爲て聞届しめ曾て重税の論を容る者なし、汝ち幸ひよ浮雲の愛寵を博すと雖も内又願みて病からずと爲すか、汝ち富貴の身代を三下りたらしむると亦た恕すべしと雖も延て瘦身代の者

んど何の謂
 ぞや○前後正
 休なからしむ
 ○實は淫風を
 煽動し○女徳
 を滅茶々々々
 す○女徳を紊
 亂するの害物
 なり○余が箴
 言を一聽せよ
 ○言語未だ熟
 せざるよ○小

をも倒し、其甚だしき人の臍を嚼る者をも迷之す、
 我豈一管を加へて其猫の皮を破らざるべけんや、
 我れ先づ汝の罪を數へん、汝ち三味線よ、汝ち靈あ
 らむ請ふ謹て聽一聽せよ、若夫れ艶陽三月春色爛
 爛たる櫻花と瑤欄を擁して繡幕を披くが如く、鳥
 娜たる揚柳と彫篋を罩て翠簾を垂るゝ似たり、淡々
 たる紅鬪と山籠を抹して半面の美人を學び、淺くた
 る緑波と池塘と溢れて滿瓊の芳酒を傾むく、花と戯
 る、の蝶と蹠蹠として妙舞し、柳を穿つの鳥と喋喃
 として能く語る、此時節と際して苟くも情ある者誰
 か春遊を思ふとざらんや、人皆な之を思ふ然れども遊

學に入て普通
 の學も隨ふべ
 きの時○淫奔
 の學早く已ま
 脳味噌増み感
 ○窓父兄たる
 者注意せすん
 をあるべから
 す○絃歌師よ
 伴ふて窺かよ
 深宮入り○
 色を教ゆるを

心を煽動する者あるゝ非らざれむ、未だ身代を一遊
 ゝ抛つ者とあらざるあり、汝ち此時に乗じて妓流の
 尻又從ひ花間と鳴り柳陰と謠ひ、以て遊冶郎を煽動
 し管又遊心を動かして有頂天外と飛しひるのみなら
 ず迷ふ之を花街柳巷と誘ふて不治の遊感病と懸染せ
 しむ其罪一なり、夏と吹よ川風を納涼船の中と歌ふ
 て却て半死半生の汗を絞らしめ、秋と酒を賞菊と勸
 め醉を觀楓と翫りて惜むべき紙幣をして楓葉と共に
 飛さしめ、尊ぶべき黄金をして菊花と同散せしめ猶
 ほ未だ饜老無茶苦茶と治郎を手慣の調子と載て雪見
 酒と及ばし、春夏秋冬他の靈物と彈出さんと欲す是

以て業と爲す
 ○其文句よ曰
 く園むらさき
 も中しよと○
 嗚呼亦たべら
 ぼうの行止り
 ならずや○海
 棠の艶ありと
 雖も語を解せ
 されむ人未だ
 迷えず○桃李
 の美ありと雖

れ其罪の二なり、汝ち山よ千年海よ千年の古猫古狸
 と秘密の調子を合せて稽古所を横町の最も暗き處よ
 開き、少年懶惰漢を招き仇文句を歌ふて其心魂を鎔
 かし、終よ之をして一生無爲の厄介籍よ陥らしむ是
 れ其罪の三なり、汝ち温習と稱し箱入娘を集めてお
 染久松の道行き方角を示しお駒才三の痴く練法を教
 へ、終よ生娘をして産物とならしむ、是れ其罪の四
 なり、汝ち奥様御新造の爲めよへこく鳴て以て鬱
 を掃ひ、少しく勤る所あるが如しと雖も僅よ葉唄の
 二ツか三ツと教ゆれを忽ち楷梯となして之を不貞よ
 導き、往よよして閨門不治の騒動を惹き起す、是れ

も情を吐され
 ば客未だ溺れ
 す○尤も仇ツ
 ぼひ文句を以
 て人を迷とす
 ○人魂をグニ
 ヤグニヤたら
 使む○校書
 人を欺すと皆
 此力よ依るの
 み○晩よ際す
 れを必らず二

其罪の五なり、汝ち寄席よ上つて公然技を賣り以て
 屁餅太夫芥之助等の口を養ふと稍や力食よ近しと雖
 も、其技を第二よ置き専ら之を餌としてお轉婆娘淫
 亂後家を約んと欲す、是れ其罪の六なり、汝ち塲處
 を擇ばず身分を顧みず縦ひ驛公の爲めよ挑まらる、
 と云ふと雖も、唯々杯盤の間よ倒れて船底枕の代理
 となり、終よ驛公をして破道德の看板を貴重の驛よ
 附着せしむる者よ其罪七なり、汝ち外妾或よ私娼の
 巢窩よ潜み瓜を以て撥よ代へ低音よして心意氣の都
 々一を歌ひ、書生或よ少年よして格子戸の外に開し
 め嗚呼羨ましい哉の妬念を發せしめ、遂よ糞焼よ起

上り新内を諸
 ひ○先づ一二
 の艶曲を歌ふ
 て○汝を媒と
 して嫖客を狂
 す○其罪輕か
 らずと爲す○
 其極や一家の
 滅亡を惹起し
 ○伴當も之が
 爲めよ身を誤
 り丁稚も之が

さしめて之を煩腦道よ誘ふ其罪八なり、汝ち藝妓よ
 従ひ其名と絃歌を賣ありと雖も、其實と無手と一
 般、甚九勝惚も亦猶は能せずして藝妓の鑑札を受し
 め以て初めより尻を賣らしめんと欲す、是れ其罪の
 九なり、汝ち初め治郎を道樂よ誘ふて二上り新内の
 明烏一二段を學をしめ、其藝と却て仇と爲り其身代
 を屠り盡すの後と、之をして啡々此を賣て人の門口
 よ立しむ、是れ其罪の十なり、汝既よ此十罪を犯す、
 ペシ、叩き折て之を泥の中へ放り込も猶其罪を消
 滅すべからず、汝ち猶申し分ありとするか、故よ我
 れ汝ちよ重税を課するか否らされを遊里の外斷然へ

コく鳴すを禁せんとす、汝ち懺悔心あらを屹度以
 後を慎めよ、

痴情の解

爲めよ有頂天
 となる○其器
 と小なりと雖
 も其害之大な
 り○今や天下
 を擧て皆汝の
 爲めよ化さる
 ○國安妨害と
 して宜しく之
 を停止すべし
 ○人よ男女あ
 ると猶天よ日

痴情と何ぞや、曰く男女相通するの情是れなり、
 而して天下人情の數夥多なりと雖も、男女相通する
 の情より甚だしきと莫し、夥多の人情中、搦手放談
 管鮑管ならざるの情もありと雖も、然も未たお前と
 一所又暮すなら深山の奥の詫住居も尙且つ厭とざる
 の情より厚きとあらず、一室同衾兄弟管ならざるの
 情ありと雖も、而も此世の縁と薄くとも未來と必ら

月あるが如し
 ○天又夜這星
 あり○禽獸も
 して猶此の如
 し况んや人よ
 於ておや○お
 半長右衛門を
 以て其元祖と
 爲す○天下何
 を以てか之よ
 比せん○實よ
 言語同斷○只

ず一蓮托生、淺草寺鐘の五時を報ずると同く、残る
 一時と冥土の土産と爲し、墨陀水底の藻屑と消るの
 情より深きとあらざるなり、一車同乘芳原も練り込
 の情や親きと即ち親と雖も未だ及をず、一鍋二箸牛
 店も暴飲するの情と密と即ち密なりと雖も未だ及を
 ず、凡そ痴情と人情中の切なる者、忠義も以て比を
 爲すも足らず、孝悌も以て喩を爲すも足らず、其極
 終も誓ふも死を以てする者天下滔々皆是れなり、忠
 義や孝悌や爲めも性命を惜まざる者其例も乏しから
 せと雖も、未だ痴情を以て例すべからざるなり、今
 夫れ花顔柳腰嬋娟徳約、沉魚落雁の別嬪として輾然

呆れ返るの外
 なきのみ○痴
 と之馬鹿の謂
 なり一よ之を
 白痴と云ふ○
 別嬪より來つ
 て我袖を引か
 心随分悪い心
 持とせせと雖
 も○男子よし
 て慎むべきの
 第一たり○猫

一笑斜も秋皮を注ぎ、斯いふ殿御と添臥の身と姫で
 世の果報ぞト將も縫着し來らんとするの時運も遭遇
 せんか、誰かグニヤク然として海鼠と一般の状を
 呈せざらん、誰か身上も命もなんも入らねへ脊負
 て行け持て行けと云ふの情を起さいらん、然り而し
 て忠義や孝悌や之れが爲めも性命を賭し身代を傾く
 る者其例多からざる何ぞや、彼も天賦の人情よし
 て是も人造の人情なれをなり、何となれを死之人の
 最も惡む所、而して獨り男女の間其交り愈々密なれ
 心其惡むべきを忘る、豈も天賦の人情も非るか、若
 し夫れお俊の傳兵衛も於るお三の茂兵衛も於るお駒

の鯉魚節よ於るが如く狐の油揚よ於るが如し○古へ之あり今と則ち無し○狂句よ曰く金なくを何の已れが色男と○智者も必らず痴者も變ず○何ぞ其れ活智なきや

の才三よ於るお七の吉三よ於る權八の小紫よ於る安珍の清姫よ於る、皆是れ天賦の人情を盡す者か、然れども道を悟る人より之を見れを其情と寧ろ憐むべきも其疾之餘り擧た話しよと非ざるなり、是よ於るか痴情の名あり、痴とて馬鹿の變名なり一夫一婦の爲めよ死し一婦一夫の爲めよ死す、馬鹿の變名あるも亦た宜なる哉、此よ由て之を觀れを男女情交の厚き已むを得ざるよ出づ、唯これを愼むと溺と惑ども在り、世の子弟之を猿鼻禪の端よ記して可なり、

笑ひの解

○彼をして鼻下を伸さしむべし○情よ於て亦た然らざる能とす○索尻多女郎よ欺されんよりと寧ろ臍を抱ひて眠るよ如かず○其れ之を猿鼻禪の片ッ端よ記せよ○

語よ曰く笑ふ門よと福來ると、蓋し笑ひの人よ於る實よ一大義徳たり笑ひと吉事の爲めよ發す、決して凶事の爲めよ發する者よと非ざるなり、樂みあれを加樂くと笑ひ、悦びあれを再乎くと笑ふ、豈よ夫れ迷尊くと手として悲しみ思苦くと然として泣くが如き不吉の事ならんや、大黒天と笑ふて福神の第一座を占め、蛭子先生と笑ふて紙幣の一大位を卜す張飛と勇なりと雖も笑えずんを何ぞ曹操を退くるを得ん、高尾美なりと雖も笑ふ無くんを何ぞ頼兼を迷えずを得ん、笑ひの徳たる以て知るべきのみ、落語者流動すれば乃ち曰く、笑ふて損せしと天下只箔屋

諺ことわざよ曰いく泣なて
 暮くすも一いっ生せい笑わら
 つて暮くすも亦また
 た一いっ生せいと○我われ
 と其その言ことの虚まな
 らざるを信しんぜ
 ○澁しぶつ面おもてと貧ひん
 乏ひんの相あなり○
 相あ手て無なけれを
 笑わらふ能あたらず○
 明あ店てんの姪ひめ子こ然ぜん
 として莞わん爾に笑わら

のみ、箱はこ屋や箱はこを塗ぬるとき偶たま々々笑わらふべき事ことあり覺おぼへず
 口くちを開ひらて笑わらふ、机き上じやう多た少せうの箱はこと忽たちち散さん亂らんし了らすと、
 噫あ笑わらえんか笑わらえんか、人ひと須すらく笑わらふべしと雖なも今日けふ
 の流りやう行かう笑わらひの如ごときと亦またた應まさふ嚴げん禁きんすべきなり、流りやう行かう
 笑わらひとと果はたして何なんぞ、俗ぞくよ之これを諧おべ諷つ笑わらひと謂いふ、肩かた
 と聳そへて富か岳がくの如ごとき顔かほと和やわひで布ほ袋ていの如ごとき或あると頭あたまを
 敲たたき或あると膝ひざを打うち、成あ程ほど左さ様やう至し極ごく御ご尤もつもと、意いを迎むか
 へ頸のびを拂はらひ屁へい意いくとして頻しきり頻しきり満まん面めんの笑わらひを呈ていする
 即すなはち是こゝれなり、古いにしへへと無む氣き無む力りき好よんで人ひとの牛うし馬ばと爲な
 る者もの即すなはち辯べん問もん獨どくり之これを爲なす、今日けふと然しから走い荷かりくも手て
 蔓つるとなり金かね蔓つると爲なる者ものを看みれと、人ひと物ものの如ごときを問とて

ひ○花はなの開ひらく
 を笑わらふと云いふ
 ○是こゝれ余あの笑わらふ
 ふ所ところ以もて○笑わらふ
 又また苦く笑わらひあり
 奥おく階はで笑わらふあ
 り○故ゆゑなきよ
 笑わらふべからず
 ○之これを馬ば鹿か笑わら
 ひと云いふ○笑わら
 て答こたへず起たちて
 山やまを見る○笑わら

走は親しん疎その如ごときを論ろんせず、東あ西せいより南なん北ぺいより左さ右うより
 前まへ後ごより、皆みな争あふて屁へい意いくの笑わらひを呈ていすると、實じつ
 ぶ今日けふよ於おて社しゃ會かい一いっ般ぱんの風ふう習じゆたり、呼よんで流りやう行かう笑わらひと
 爲なすも固かたより証あ言げんよ非あらざるなり、余あが友とも某た子し曾して流りやう
 行かう笑わらひを嘆たんじて措させ、俳はい句く一いっ首しゆを呻う吟いんて曰いく、屁へい意い
 くの利り益えき一いっ等とうささよ越こへと僅わずか々々十七じち字じ能よく諧おべ諷つ談だん
 輩はいの穴あなを穿うち去さる、亦また感かん服ふくすべき哉や、余あや性せい來らい笑わら
 ひて好あみ事こと又また逢あひ乃すなはち笑わらひ物もの又また遇あひ乃すなはち笑わらふ、陳ちん搏ぱく
 其人そのひとよ非あらずと雖なも時とき又また或あると笑わらふて人ひと力りき車くるまより顛てん落らくす
 るを知らず、已おれ既すでに此こゝの如ごとき故ゆゑ又また交まはる所ところ親しんむ所ところの
 人ひと皆みな能あたく笑わらふ、豈いかん管たび又また感かん作さく社しゃ會かいの入い笑わら人ひとのみなら

ふべきも笑ひ
ひ笑ふべから
ざるよ於て笑
ふべからず○
笑ふも亦た
戯則ある者の
如し○余の之
を云ふと決し
て出鱈目出放
題も非ざるな
り○蓋し偶然
に非す○獨り

んや、然れども余が笑友中能く流行笑ひを笑ふ者と
未だ曾てあらず、世人の余を以て笑ひを知らずと爲
すも亦た宜なり、嗚呼流行笑ひを笑とんか、屁意々
々の利益縦ひ一等二等人又先つも豈余の好んで笑
ふ所ならんや、余一日笑友を笑堂又會し世の變遷
を笑ひ、社會の風潮を笑ひ又た流行の笑ひを笑ひ、
笑ひ極つて感あり終り笑ひの解を作る、亦是れ笑ひ
の種のみ、

舞乱散史に與ふる書

お馴染の色男裙遊瑠璃借好遊居士、大威張る威張て

笑つて之を記
す○笑ふ人と
笑へ余も於て
痛しども痒し
ども思とんや
○笑ひを後世
よ遺す○不肖
何之誰頓首し
て○何之何兵
衛謹み再拜し
て○大馬鹿の
三太郎丁寧よ

恐れ多くも勿体なくも居士の親自筆を舞乱散史の頭
上又戴かしむ、散史平々本突張て恐れ入り畏つて拜
見せよ、伏て思ひ能くく考ふれを天地氣候の循環
なる者と實も奇妙奇手列もして、暑を欲せざるも暑
來り寒を願とざるも寒至り、寒來暑往の回轉之逆も
腕突を以て制止すべからず、其腕突を以て制止すべ
からざる故も、昨日迄ミンくくく鳴且つ暑を
報せし蟬の聲も、今日とばつたり黙止し、昨夕迄ち
りんくくと鳴り且つ涼を送りし風鈴も今日と已も廢
物又属す、此時又當てや流石の居士も亦た少々困難
筋の一件あり、何ぞや曰く、之を意氣よ云へを移り

お辞儀をして
 ○一書を某君
 の足下呈す
 ○鉄釘の折を
 並べて以て一
 言す○七面倒
 ながら以て答
 ふ○止を得せ
 逆つべ返りし
 て○時維れ大
 暑○爾來大
 御無沙汰を致

替の用意、之を野暮云へ冬着の支度是れなり、
 散史試み一寸考へ見よ、初夏の移り替へる裏を
 取り去り夫れも用辨すべしと雖も、冬着の移り
 替へる中々以て其様な手轉の次第と参り難し、縦ひ
 二タ子木綿と雖も一枚位と新調せざるべからず、而
 して其新調するも當り第一入用の物と○的なり、故
 ん其○的を少々拜借致し度存するなり、斯く申せを
 散史必らず將云とんとす、單物を重ね着せば別段
 冬着を新調するも及むず、と是れ至極誤尤も千萬
 似て其實誤尤も千萬の言も非ず、何となれを今年と
 反物の相場極く安直にして、極粗末の白地など一

す○時正よ嚴
 寒ならんとし
 ○秋風飄々とし
 して身も染み
 ○寒風凛々とし
 して横面を拂
 ひ○足下御無
 事なるや否や
 ○大慶く○
 欣賀の至りよ
 存じ奉るなり
 ○伏して惟み

反の直段二十錢乃至廿五錢位なり、新しき反物よし
 て猶ほ此の如し、矧んや其古物の安きと知るべきな
 り、然り而して居士の如きと憚り様ながら大休は八
 錢乃至十錢の古物を買て之を着るのみ、芝居見物其
 着物なり、女郎買も亦た其着物あり、烟火の立見其
 着物なり温泉納涼も亦た其着物なり、之も因て大切
 の一枚着物も肩窓を生じ膝も門を明け、透し見れ
 るに恰も洗ひ洒しの寒冷紗と一般、ベロく然ウスツ
 ペラ乎として逆も修繕の目的なし、若し之を太閤様
 が乞食の時の衣服と云ひ博覽會も出さしむるも、人
 之を賤物と思とざる有様なり、嗚呼亦た可哀想なら

るよ○頭を下
て考ふるよ○
掘り翠玉をし
て熟思ふよ○
胸よ手を置て
思案を回らす
よ○天下の事
儘よならねが
十の九分九厘
○儘ならぬ浮
世とと豫て知
りながら○足

老や、故よ重着を爲さんと欲するも得べからず請ふ
君其哀れ墓無譯柄を推察せよ、君若し人間並の慈悲
心あり十八並の了簡あつて、未永く居士と交際を爲
さんと欲せよ小遣ひ錢を殘らず放り出して居士よ與
へよ、居士と決して不正直者よと非ず、居士死際よ
と必らず返済すべし、若し又散史の手許よ無ければ
外より周旋し以て居士よ與へよ、居士と必らず四斗
樽大の印紙を貼用し以て有る時拂ひの催促なしと云
ふ事柄と證明せん、散史々々以て如何と爲す、冀と
くを大至急嫌か應かの返辭を贈れ、頓首くお負よ
最一つ大頓首

履よ花柳巷を
踏み○自ら妓
情を尋ね○君
と至体薄情の
質なり○請ふ
試みよ之と説
ん○足下の爲
めよ之を饒舌
らん○お氣よ
障らば眞平御
免○君が火の
様よなつて怒

好遊居士に答ふる書

自分免許戀男の總督、唐丹跣足時次糞を喰への大意
長、大不満願る立腹、笑ひ乍ら泣き乍ら考へながら
小癩よ障ながら、御自身よ墨を摺り一筆示し以て想
顔の甚碌薄野兄的の好遊居士よ答へ遣へず、居士能
く借金取りよ逢ひたるが如く痴々固執、親父のお目
玉を喰ひし如く痴意作なり、散史が申し述る所の仰
せを奉拜奉聴せよ、熟考ふれを最早初冬と爲り、向
ふの氷店と俄よ焼芋屋よ變じ隣の團扇屋と將よ黒太
陽を賣出さんとするの時、居士倅ひよ虎列刺病よも

るも僕と決し
て恐いと何
とも思えざる
なり○請ふ耳
糞を扭つて之
を聴け○面を
洗つて之を見
よ○眼玉を刮
つて見一見せ
よ○貴君此頃
宜い金儲けあ
りや否や○相

取附れず、ヒン／＼然シヤン／＼乎として無駄飯を
食とる、由、鬼よ角お目出度存せりなり、然り而し
て其ビン／＼然シヤン／＼乎として無駄飯を喰ふ故、
今年も亦た初冬も際し十人並の冬着を新調せんと欲
し助力を散史よ請ふ、何ぞ其意愚痴無きの甚だしき
や、又何ぞ屁固垂れの甚だ敷や、四季の巡環と春夏
あり秋冬あり、夏と暑くして冬の寒さと開闢以前よ
り造物者の已に確定したる規則よして、今更驚愕仰
天を用ひず、三歳の鼻垂小僧も承知する所なり、是
を以て古人と霜を覆ば堅氷の用意を爲し、天陰れば
雨降の支度を爲す、是れ火事を出さるる前よ洋燈を

變らず野良倉
然として海鼠
の如く○人僕
を稱して氣樂
人と爲せども
其誤當人と決
して氣樂よと
非ざるなり○
蓋し是れ見當
違ひなるか○
僕思ふよ決し
て然らず○猫

消し地震を喰とざる前よ辭表を出すと同様の手續き
よして、其堪え差當り周章狼狽の不都合なきを慮ば
かるなり、然るゝ居士の如きと相替らず其邊よ注意
せず何事も頓着なく、生意氣もも霄越の鏡と持ぬ杯
と、年箇年中巾着の底を叩き暑寒の支度を爲さず、
氣候の替る毎よ大狼狽大周章を爲し、米搗虫の如く
無暗も頭を下け又たお茶挽女郎の無心狀の如く、長
鱒敷寝言文句を並べ金借をのみ是れ務む、なんと呆
れ返つた奴子三ならせや、夫れ金と天下の融通物よ
して能く働く者能く儲け、能く惰る者貧乏となる、
是れ素より誣べからざる自然の道理たり、故よ旨い

も杓子も欣く
 然たり○酔て
 枕す美人の膝
 醒てと握る滑
 稽の筆○酔て
 管巻や猶可愛
 と謂ふも非老
 や○是れ余が
 志願なり○君
 以て如何とな
 す○君も仲間
 入を爲ば如何

物を喰ひ美衣服を着安樂暮さんと欲すれを、能く
 働き能く儲けるも如ざるなり、然るも居士の如く平
 日のらくら遊びぶらく情け、而して人並み春之花
 を観夏之舟を泛べ秋之紅葉を愛し冬之雪見を爲し、
 或之美酒も酔ひ或之佳肴を食ひ女郎を買ひ遊者も戯
 れ、隨の娯帝其人の贅澤を極めんと欲するも誠も間
 違つた話しよして、恰かも羽翼なくして千里も飛ん
 と欲するの馬鹿者と何ぞ異ならんや、居士少しく思
 案する所あれよ、若し夫れ能く働き能く稼ぎ無駄錢
 を遣之老、而して猶ほ十人並の衣服を着る能はず十
 人並の食物を食ふ能とされば、其時と散史が造物者

○其妓や恰も
 小町の如く○
 別嬪も非ずし
 て劣品なり○
 二三平満の油
 繪を見るも異
 ならず○君之
 を秘すると雖
 も僕之疾くの
 昔しより之と
 知れり○何ぞ
 速かよ之を白

よ代て金儲りの秘傳を教授すべし、先つ其能く働き
 能く儲け少々貯金の出来るまでと衣服なしと雖も恥
 る勿れ少々寒しと雖も我慢すべし、試みよ見よ御釋
 迦様之年中裸體も非ずや又見よ雁鴨之嚴寒と雖も水
 の中よ住も非ずや、居士此邊をも篤と熟考せよ、且
 つ幾度無心狀を散史も贈るも散史之元金貸商賣も非
 老故も公債證書一枚も之れ無く、金銀貨紙幣等も所
 持せず否な縦ひ公債證書澤山よ之あり金銀貨紙幣も
 随分これを貯ふるも、居士の如き腰抜け賤生野良鞍
 坊主も貸與する金之目腐り錢一文も更よ之れなく候
 依て此度の無心とお氣の毒様ながら平御斷り申す

状せざるや○
依て言告口を
爲すと此の如
し○餘と後日
と期して之を
述ん○先之茲
又筆と止む○
狂怪珍言○頓
首々々○惜き
筆止あらく
し○敢て危
醜を乞ふ○君

なり、是れを之れ斷金の交りと云ふ、居士悪からず
承知を乞ふ、時又迷痴似重産年本月本日、舞亂散史
極々大切の郵便切手二錢を奢り以て大略ながら面倒
ながら好遊居士よか返事申すと斯の如し、忍惶謹言
めで度し

賄賂先生の傳

賄賂先生姓之袖内名之鼻藥輕薄齋と號す、諂諛國の
人なり、先生性頗る狡猾長じて佞才あり、先生曾て
脊肩諂笑の人と居り貪利枉法の徒と交り、専ら諂學
を曖昧摸稜の中ニ講究して夙よ奸雄の名あり、先生

失敬と怒る無
くんを幸甚々
々○賤生姓之
香湖名と酒亞
突○姓と馬戸
名と鹿平功名
を凡太郎と云
ふ○其姓名を
詳かよせせ○
或と云ふ樂子
なりと○或と
云ふ父無子な

山師居士辨茶羅子と最も好し、常ニ相伴ふて權門要
路ニ出入し暗ニ其勢力を朝野の間ニ逞しふす、故ニ
人皆先生ニ由て其勢力を藉り無理の願望ある者、困
難の哀訴ある者、我が私し謀んと欲する者、市の
利を網せんと欲する者、人を倒して之ニ代らんと欲
する者、人を困めて之を樂まんと欲する者、人の膏
血を喰とんと欲する者、人の財産を横取せんと欲す
る者、皆必らず先生ニ由て之を謀る、先生既ニ諾す
れを事必らず成らざるなく願ひ必らず達せざる無し、
先生の才力も亦た甚だ大なる哉、然り而して先生と
元妖術ニ長じ且つ巧ニ其体を變ず、其先生の權門要

りど〇幼よし
て世の中を茶
又するの志し
あり〇貧乏の
家又生れ〇繼
母又係つて半
死半生の目よ
逢ひ〇寒を忍
れず暑又驚か
老〇三度の飯
さへ食を以て
足りと爲す〇

路又入るや或之勝手より入り或之臺所より入り、或
は形ちを換て入り或之物又托して入り、其本休を露
して入る者幾んど希なり、是を以て人其入るを知ら
せ、既又入れを忽ち人をして一目欣然として垂涎の
願又滴るを知らざらしむ、遂又其心を籠絡して儘人
を駕御す、先生曾て諸生又告て曰く、噫吾已又衰へ
たり、吾復た國權を左右すると能とす綴又以て君意
を得るのみ、請ふ思へ今之則ち人智愈開けて互ひ又
狡獪を圖はし吾れ獨り狡獪を専ら又すると能とざる
なり、生問て曰く竊又聞く先生の狡獪之世又一世よ
り熾ありと、又誰か能く先生又敵せんや、先生行ん

蓋し立派な茶
人なり〇人稱
して仙人の影
法師と爲す〇
長じて益々奇
を好み〇亦是
れ一奇人と謂
ふべし〇珍し
い人物なる哉
〇小見と其面
を見て泣く〇
其氣風よ於て

と欲すれば路又法律の有るを畏れず途又規則のある
よ關せず、巧又身を潜めて入り竟又必らず其志しを
達す、是れ生輩の常又先生の高德を欽慕する所以な
り、敢て問ふ猶以て衰へたりと爲す者之何ぞや、先
生莞爾として曰く余が祖昧内氏之擅制時代又生れ長
じて奸邪社會又入り頗る勢力を得て揚々として天下
又横行し、苟くも我が欲する所の者之其利害を論せ
ず其正邪を問とす、百意の如くならざるを莫し、故
又天下の人皆我祖を仰ひで苟くも事あれば來つて謀
り其權殆ん必王公又讓らせ、常又百官有司を曖昧の
中又駕御す、是を以て當時地獄の沙汰も金次第の諺

と甚た取るべき者あり○益槍も似たりと雖も決して益槍の人非ず○活潑よ亂暴とを能く噛み別け○毛唐人の所謂仁者あり○酒も飲む園子も食ふ所謂兩天秤なり

あり、降つて壓制時代及び猶能く横行すと雖も未だ執權者を左右するが如きの勢力とあらず、唯大罪人の首を繼が如きの功あるのみ、生又問て曰く其後と如何ん、曰く我勢力猶未だ全く之衰へずと雖も復た舊時の如く顯然表門より出入すると能はず、是よ於て幻術を發明し隠見出沒機を乘じて之を施し、由て以て漸く我勢力を維持せり、故よ其勢力と未だ人の耳目に觸れざと雖も、其功績と却て舊時と愈る者なきよ非ず、亦聊か以て我徳を證するよ足るべきなり余思ふよ余が家と千百世を經と雖も決して滅亡の憂ひとあらざるなり、何となれを余は勉めて彼我の

○錢あれたを女郎を買ひ錢なぐれを臍を抱へて眠る○常又曰く我と石地藏の再來なりと○螺を吹き立て世人を矚着す○虚言を突み妙を得たり○十中の八九人と皆鼻

の兩便を謀れとなり、敢て問ふ幻術と如何なる事ぞや、曰く其術と枚擧又違あらずと雖も、概ね吳服切手と變じ酒茶の切手と變じ或と菓子箱と變じて其底よ潜み或と雜物類と變じて其中よ隠るよを以て通例と爲す、而して既よ排却又遭すんば則ち後よ本体を顯して公けよ入るも妨げず、然りと雖も其初め入るや後底よりするを以て最も入り易しと爲す、乃ち其正夫人の手を藉り或と其權夫人の尻よ就くの類是れなり、先生の才概ね既よ斯の如し、其徳益々世よ顯れ人益々之を信ず、殊よ奸商等と先生を以て營利の指南と爲し、之を尊ぶと神の如しと云ふ、嗚呼先

を撮んで近よ
らす○自ら號
して天狗堂と
云ふ其癖鼻と
獅鼻○金を與
ふれを直ちよ
笑ひを含む○
其了簡恰も乞
食の如し○人
呼心雜炊賤生
と云ふ亦た宜
なる哉○敢て

生の名望も亦た甚だ盛んならずや、贅も曰く、
朝も權門入り夕べも要路入り、巧も驅術を施
して人の待遇を厚ふす、權門要路其歩する所も任
せ、奸子佞人忽ち其怒りを和ぎ、莞々笑を含んで
其哀訴を允す、天下何者か我が賄賂を惡む、賄賂
と古來人皆戀慕す、世人復た毒霧も苦惱する勿れ、
賄賂の徳と甘露より甘し、賄賂も由れを事の懼る
べき無し、世人又其失錯を憂ふる勿れ、賄賂の社
と天社より著るし、賄賂も頼れを其誤りを誤りと
せず、賄賂我を助けて我と忤とせず、賄賂我を救ふ
て心常も固し、唯恐る後世廟祚を傾け易きを、賄

踏ふも非す又
敢て媚るも非
す○實以て清
淨潔白○一日
と吉原も遊び
一日と新橋も
轉付さ○鬼も
角當世の色男
と謂ふべし○
性眠權と好ん
で閑あれを轉
く○臥す○

賄元來呼で國蠶と爲す、功德多しと雖も害も亦怖
るべし、天下誰か築く奸人の庫

平氣野平左衛門の傳

平氣野平左衛門と剛腸縣の人生れ得て膽勇あり、酒
亞突の面香湖の氣、山崩れ地裂るも未だ曾てびくと
も驚かず、年壯なる時武官と爲る、其敵も臨むや隱
たる一敵國の如く、彈丸雨の如く地も注ぎ硝煙霧の
如く天を蔽ふも腐へ撓せず目迷ろかき、敗る、とも
愛へず勝とも誇らず、平氣然酒亞々々手たり、其性
具率權門を庇とも思はず勢家を義とも思はず、爲す

連も先生の眞似と出来難し
 ○狂詩を好んで常よ之を賦す
 ○其篇を作や幾百篇なるを知らず
 ○常よ書を讀み軍書を好み孔明ナボレオンを友達と爲す
 ○人笑へを自か

べき事を爲し勉むべき事を勉め、敢て自分の職を怠らす又た人の手傳ひを爲さず、長官を視ると猶ほ友達を視るが如し、一日長官の旨よ忤ふ長官髯を捻練て怒つて曰く、コレ平左衛門氏よ氏の職よ従ふや屢失敬を以て我よ忤ふ、是れ本氣の沙汰か將た常談か將た又た我を小馬鹿よするの意か、請ふ眞正直よ其所存を云へ、平左衛門平氣よ空吹て曰く僕の云ふ所爲す所よ決して常談よ非す又た足下を小馬鹿よするよも非す、唯月給丈の事を爲し月給丈の事を勉むるのみ、故よ了簡の在る所僕よ關すれを必らず足下を冒す、足下何ぞ大人氣なくも其れ怒れる此の如くな

らも笑ふ○人之を勝るも怒ららず人之を笑ふも屁とも思ふ
 ○膽力あり曾て化物と相撲を取ると云ふ蓋し信歟
 ○其云ふ所當よとならずと雖も儘本當のとあり○無神

るやと、乃ち職を辞す是より平左衛門商法を初め、只膽力を以て業を営む、損耗よ屈せず利益よ喜むを然れども商法と元其得意の事よ非す、自ら以爲らく損益相償とすんを勉強何をか爲さんと、終よ志しを立て新聞社會よ入る、是より又た持前の膽力を以て筆を執り事を論せ、敢て罰金を恐れず敢て禁獄よ撓まず、輿論の耳目を以て自ら任ず、當時の人皆平左衛門を稱して獨り新聞記者と爲す、名聲天下よ香し、晩年已れの經歷する所よ因て平氣論一篇を作る其大略に曰く、

夫れ軍よ臨んで敵よ平氣なれを則ち戦ひよ功あり、

經かと思へば
 無神經でもな
 し○自分も誇
 り人も賞す○
 凡そ男子と生
 れたる以上と
 斯ありたき者
 なり○故も後
 世も名を遺し
 ○人一代名
 と末代と云ふ
 事を實行せし

事又臨んで物も平氣なれを事又續あり、然れども
 長官も平氣なれを免を食ひ同僚も平氣なれを鼻を
 撮まる、是も由て之を看れを平氣の氣たる損益利
 害を含蓄す、平氣となるべき時よ平氣よして平氣
 となるべからざるの際よ平氣とならず、以て物と
 浮沈し以て世と推移せを庶幾と過ち無かるべし、
 我れ晩年願ふる悟る所あり壯時の閉氣を回顧すれ
 ば恥づべき者笑ふべき者往々これあり、蓋し平氣
 と氣の平かなるなり閉氣の謂よと非ざるなり、氣
 平かなれば和氣閉れば衝く、我壯時の氣多くと
 是れ閉氣、我晩年の氣多くと是れ平氣なり、平氣

人なり○聞者
 涙を掩ふ○我
 をして政權を
 握らしめを應
 ん此人よ贈位
 すべし○虎と
 死して皮を遺
 し人死して
 名を遺す○鑑
 みざるべから
 せ○常談半分
 ん之を記す○

と以て人よ接し己れを持するよ不撓不屈の心を以
 てせと則ち平氣の徳や必らず大ならん
 平左衛門此一篇を著し一朝其筆を投じて隠る、清風
 明月以て吟咏し、園蔬圃菜以て耕鋤し、世事を談せ
 ず塵務を語らず平氣として茅廬の中よ起臥し、空々
 寂々以て一世を終と云ふ
 野史氏曰く平左衛門之蓋し千萬中得難きの人なり、
 而して之を成す者之平氣の徳なり世人鉄面皮の者
 を稱して平氣の野郎と爲すも余と決して取らざる
 なり、嗚呼平左衛門の膽勇ある者之往々平氣の術
 ん乏しく、平氣の術よ精き者之往々平左衛門の膽

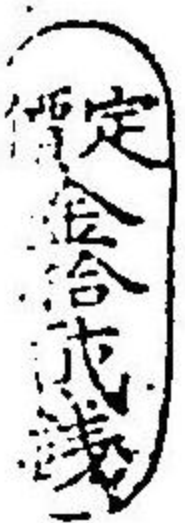
頼まれもせぬ
傳を記して以
て後の人よ示
す○其實歴を
記して笑ひ草
よ供す○是れ
餘計な手間潰
しよ非ざるを
信せざるなり

滑稽記事論
説文類語終

勇なし、余今平左衛門の傳を記し、一と以て平氣
の何物たるを明かよし、一と以て世の閉氣者流を
戒むと爾云、

滑稽記事論説文終

明治二十三年八月廿三日印刷
同二十三年八月廿五日出版



版
権
所
有

東京市淺草區御藏前片町二十番地

著者 西 森 武 城

大阪市東區備後町四丁目廿六番屋敷

發行者 梅 原 忠 藏

大阪市東區高麗橋五丁目四十五番屋敷

印刷者 大 垣 彌 太 郎

圖書出版社會藏板

同	同	同	同	同	同	同
東區備後町四丁目	南區心齋橋北詰	東區淡路町二丁目	東區南久太郎町四丁目	東區北久太郎町四丁目	東區安土町四丁目	大阪市東區備後町四丁目
梅原龜七	中村芳松	金川善兵衛	濱本伊三郎	岡本仙助	積善館	吉岡平助

